

白川金色院跡発掘調査報告書



2003
宇治市教育委員会

表紙写真

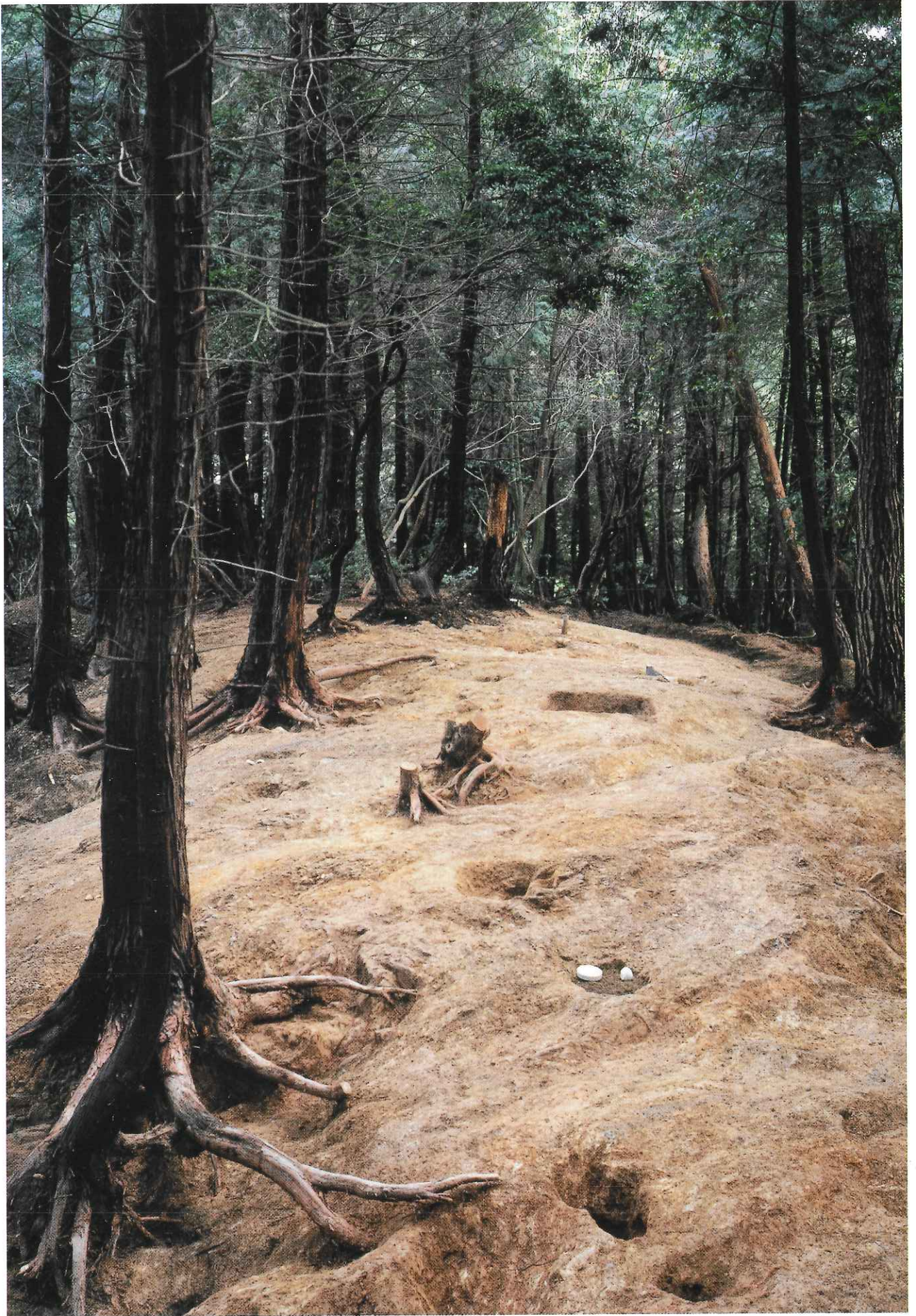
白川上空より宇治・京都方面を望む
寿福滋氏写真



創建期仏堂跡 SB3401…平成7年度第2調査区



中世坊院跡 (SB2101・2102 他) …平成6年度第1調査区



経塚関連遺構 (SX5501・5502 他) …平成9年度第5調査区

序

白川金色院跡は、平等院より山一つ南へ越えた美しい白川の谷里に残る遺跡です。平安時代後期にあたる康和4年(1102)に、関白太政大臣藤原頼通の娘であり、後冷泉皇后であった藤原寛子が建立したと伝えられる寺跡です。記録によれば、その本堂は文殊菩薩を安置した金色に輝く大きな仏堂であったといい、その他にも多くの堂舎が建立されていました。

現在、白川区には、この白川金色院に係る重要文化財指定の仏像あるいは鎮守社である白山神社や惣門などが残され、往時の幾許かを偲ぶことができます。しかし平安王朝期に花開いた栄華の実像は、永い時の経つ中で白川の自然の中に埋もれ、この谷里の風景として息づくこととなりました。

白川金色院跡の往時の姿を解明しようと、私ども教育委員会が文化庁・京都府教育委員会そして地元白川区の皆様のご協力により発掘調査を開始したのは平成5年度のことでした。以来、今年度で最終年度にあたる10年目を迎えました。平成5年度から5年間の調査は、内容確認を主とするもので、平安時代の仏堂跡の発見や貴族の精神文化を彷彿とさせる豪華な経塚関連出土品、あるいは絵巻物から飛び出してきたような室町時代の坊院跡の発掘調査などから、この遺跡の歴史的な重要性あるいは文化財的価値の高さを感じることができました。次に続く平成10年度から5年間の調査は、範囲確認を主とするもので、寺域中枢部の広がりを見極めるに至りました。

白川金色院跡は、世界遺産であり国宝の平等院や宇治上神社と同じく、平安時代の宇治を代表する重要な遺跡です。教育委員会といたしましては、今までの発掘調査成果を基にこの遺跡の最大の特徴である景観を生かし、この遺跡の保存と活用について検討を進め、後世につなげてゆきたいと考えています。

末筆になりましたが、発掘調査を実施するにあたりご指導いただいた関係各位、また絶えず温かい目で応援、ご協力いただきました地元白川区の皆様にお礼申し上げます。

平成15年3月

宇治市教育委員会

教育長 谷口道夫

例 言

1. 本書は、宇治市教育委員会が国庫補助事業として実施した第Ⅰ期5カ年発掘調査事業計画（平成5年度から平成9年度）と第Ⅱ期5カ年発掘調査事業計画（平成10年度から平成14年度）の両成果をまとめたものである。
2. 本書は『宇治市文化財調査報告』の第6冊にあたる。
3. 本書に収録する発掘調査に関する遺物・発掘調査記録は、宇治市教育委員会が保管している。
4. 本書が用いる測量座標は平面直角座標Ⅳ系である。標高は海拔高である。
5. 本書が用いる方位は座標北を基本としている。
6. 本書の遺構表示は各遺構に番号をつけ、その前に下記の遺構性格別の略記号を付した。
 SA;柵・塀 SB;建物 SD;溝 SK;土壙 SX;左記以外の遺構
7. 調査区・トレンチの番号は年度毎に設定したものと対応している。
8. 調査区については、必要に応じて「調査年数（H=平成）-年次毎の調査区番号」で簡略化している。
9. トレンチ番号については「調査回数-年次ごとのトレンチ番号」として表記し、遺構番号については4桁で表現した。1000番台を調査回数、100番台を年次ごとのトレンチ番号、下2桁で年次ごとの遺構通し番号とした。10次調査については0番とした。なお7次調査についてはトレンチ番号が2桁台となったためトレンチ番号は100番台と10番台とで表記した。
10. 各調査区・トレンチとの対応は下記表で示した。
11. 本文挿図における遺物番号と写真図版の遺物番号とは対応している。
12. 遺物実測の縮尺は、瓦・土器・石製品については1/3を基本とした。ただし、遺物によっては縮尺をこれ以外としたものもある。
13. 本書で使用した遺物写真・平成6年度の中世坊院跡・平成9年度の経塚関連遺構の遺構写真は、寿福滋氏に撮影依頼したものである。
14. 本書の執筆は荒川史・浜中邦弘・中井淳史（日本学術振興会特別研究員）・西田倫子（京都橘女子大学大学院生）が分担した。以下のとおりである。
 IV-A 荒川 史
 I・II・III・IV-B～J・V-1・VI 浜中邦弘
 V-2～7 中井淳史
 V-1 西田倫子
15. 付載については京都大学助教授山岸常人氏・奈良大学大学院生清水梨代氏・榎吉田生物研究所本吉恵理子氏・中井淳史氏に玉稿をいただいた。
16. 本書の編集は宇治市歴史資料館が行い、関係諸氏のご協力を得て、浜中邦弘が担当した。

調査年度・調査区・トレンチ対応表

調査年度	調査区	トレンチ	調査区	トレンチ
平成5年度(第1次調査)	第1調査区(H5-1)	1-1・2		
平成6年度(第2次調査)	第1調査区(H6-1)	2-1・3	第2調査区(H6-2)	2-2
平成7年度(第3次調査)	第1調査区(H7-1)	3-1～3	第2調査区(H7-2)	3-4
平成8年度(第4次調査)	第1調査区(H8-1)	4-1・3～6	第2調査区(H8-2)	4-2
平成9年度(第5次調査)	第1調査区(H9-1)	5-1	第4調査区(H9-4)	5-4
	第2調査区(H9-2)	5-2	第5調査区(H9-5)	5-5
	第3調査区(H9-3)	5-3・6		
平成10年度(第6次調査)	第1調査区(H10-1)	6-1	第4調査区(H10-4)	6-4・5
	第2調査区(H10-2)	6-2・3	第5調査区(H10-5)	6-7・8
	第3調査区(H10-3)	6-6		
平成11年度(第7次調査)	第1調査区(H11-1)	7-1～3	第4調査区(H10-4)	7-9・10
	第2調査区(H11-2)	7-4～6・16～18	第5調査区(H10-5)	7-11～15
	第3調査区(H11-3)	7-7・8		
平成12年度(第8次調査)	第1調査区(H12-1)	8-1～3	第4調査区(H12-4)	8-7～18
	第2調査区(H12-2)	8-4・5	第5調査区(H12-5)	8-19～27
	第3調査区(H12-3)	8-6		
平成13年度(第9次調査)	第1調査区(H13-1)	9-1～3	第3調査区(H13-3)	6-7～9
	第2調査区(H13-2)	9-4～6	第4調査区(H13-4)	6-10～15
平成14年度(第10次調査)	第1調査区(H14-1)	10-1～6	第4調査区(H14-4)	10-12・13
	第2調査区(H14-2)	10-7～9	第5調査区(H14-5)	10-14～16
	第3調査区(H14-3)	10-10・11		

本文目次

I	はじめに	1
II	位置と環境	2
	1. 地理的景観	2
	2. 白川金色院の歴史	2
III	調査の経過と調査体制	6
	1. 調査の経過	6
	2. 調査体制	13
IV	発掘調査	15
	1. 第I期5カ年発掘調査事業（平成5年度～平成9年度）	15
	A. 平成5年度（第1次調査）	15
	B. 平成6年度（第2次調査）	17
	C. 平成7年度（第3次調査）	23
	D. 平成8年度（第4次調査）	25
	E. 平成9年度（第5次調査）	32
	2. 第II期5カ年発掘調査事業（平成10年度～平成14年度）	36
	F. 平成10年度（第6次調査）	36
	G. 平成11年度（第7次調査）	41
	H. 平成12年度（第8次調査）	44
	I. 平成13年度（第9次調査）	46
	J. 平成14年度（第10次調査）	47
V	出土遺物	49
	1. 瓦	49
	2. 土器	51
	3. 石製品	58
	4. 金属製品・漆器他	60
	5. 経塚関連遺物	61
	6. 地鎮関連遺物	64
	7. 創建前遺物	66

VI 総括	67
1. 遺構・遺物からみた遺跡の歴史の変遷	67
2. 遺跡の範囲と今後の課題	71
主要参考文献	72
付 載	
1. 白川金色院跡経塚出土の和鏡について	73
2. 白川金色院跡出土の有機質遺物の調査	80
3. その後の白川金色院－白川金色院の近世・近代遺物－	87
4. 白川金色院惣門について	91
出土遺物一覧表（図版）	97
出土遺物一覧表（挿図）	101
白川金色院関係略年表	102
抄 録	105

図 版 目 次

- 図版 1 白川金色院跡の位置
- 図版 2 白川金色院跡と宇治川谷口部の主要遺跡
- 図版 3 第Ⅰ期 5 カ年（平成 5 年度～平成 9 年度）計画調査地位置図
- 図版 4 寺跡中心域の調査トレンチ配置図
- 図版 5 平成 5 年度 1 - 1 トレンチ実測図
- 図版 6 平成 6 年度 2 - 2 トレンチ実測図
- 図版 7 平成 6 年度 2 - 1・3 トレンチ実測図
- 図版 8 平成 6 年度 SB2101・2102 縦横断面図
- 図版 9 平成 8 年度 4 - 2 トレンチ実測図
- 図版 10 平成 7・8 年度 3 - 4, 4 - 1・3 ~ 6 トレンチ実測図
- 図版 11 平成 8 年度 4 - 1・3 トレンチ土層断面図
- 図版 12 平成 8 年度 4 - 1・5 トレンチ土層断面図
- 図版 13 平成 9 年度 5 - 5 トレンチ実測図
- 図版 14 平成 9 年度 SX5501 実測図
- 図版 15 平成 9 年度 SX5502・SK5503・SK5504 実測図
- 図版 16 平成 9 年度 5 - 1・2 トレンチ実測図
- 図版 17 第Ⅱ期 5 カ年（平成 10 年度～平成 14 年度）計画調査地位置図
- 図版 18 平成 10 年度第 2・3・5 調査区位置図
- 図版 19 平成 10 年度 6 - 6・3・2 トレンチ実測図
- 図版 20 平成 10 年度 6 - 6・3 トレンチ土層断面図
- 図版 21 平成 9・10 年度 5 - 4・6 - 1 トレンチ合成周辺地形図
- 図版 22 平成 9・10 年度 5 - 4・6 - 1 トレンチ合成図
- 図版 23 平成 11 年度第 5 調査区位置図
- 図版 24 平成 11 年度 7 - 11・12 トレンチ実測図
- 図版 25 平成 11 年度 7 - 13・15 トレンチ実測図
- 図版 26 平成 11 年度 7 - 11・12・13・15 トレンチ土層断面図
- 図版 27 平成 11 年度第 2 調査区位置図
- 図版 28 平成 11 年度第 1・3 調査区位置図
- 図版 29 平成 12 年度第 1 ~ 3 調査区位置図
- 図版 30 平成 12 年度第 4・5 調査区位置図
- 図版 31 平成 13 年度第 3 調査区位置図
- 図版 32 平成 13 年度 9 - 7・8・9 トレンチ土層断面図
- 図版 33 平成 13 年度第 1・2 調査区位置図

- 図版34 平成14年度第1～5調査区位置図
- 図版35 軒丸瓦実測図1
- 図版36 軒丸瓦実測図2
- 図版37 軒平瓦実測図3
- 図版38 軒平瓦・軒棧瓦実測図4
- 図版39 軒丸瓦・軒平瓦・軒棧瓦実測図5
- 図版40 土師器実測図1
- 図版41 土師器実測図2
- 図版42 土師器実測図3
- 図版43 瓦器・瓦質土器実測図
- 図版44 瓦質土器・須恵器・国産陶器実測図
- 図版45 国産陶器・輸入陶磁器実測図
- 図版46 石製品実測図
- 図版47 石製品他実測図
- 図版48 経塚関連遺物実測図1
- 図版49 経塚関連遺物実測図2
- 図版50 経塚関連遺物実測図3
- 図版51 地鎮関連遺物実測図

写真図版目次

- | | |
|---------------------|---------------------|
| 写真図版1 上空写真1 | 写真図版16 平成7年度(3次)調査2 |
| 写真図版2 上空写真2 | 写真図版17 平成7年度(3次)調査3 |
| 写真図版3 上空写真3 | 写真図版18 平成7年度(3次)調査4 |
| 写真図版4 上空写真4 | 写真図版19 平成8年度(4次)調査1 |
| 写真図版5 上空写真5 | 写真図版20 平成8年度(4次)調査2 |
| 写真図版6 平成5年度(1次)調査1 | 写真図版21 平成8年度(4次)調査3 |
| 写真図版7 平成5年度(1次)調査2 | 写真図版22 平成8年度(4次)調査4 |
| 写真図版8 平成6年度(2次)調査1 | 写真図版23 平成9年度(5次)調査1 |
| 写真図版9 平成6年度(2次)調査2 | 写真図版24 平成9年度(5次)調査2 |
| 写真図版10 平成6年度(2次)調査3 | 写真図版25 平成9年度(5次)調査3 |
| 写真図版11 平成6年度(2次)調査4 | 写真図版26 平成9年度(5次)調査4 |
| 写真図版12 平成6年度(2次)調査5 | 写真図版27 平成9年度(5次)調査5 |
| 写真図版13 平成6年度(2次)調査6 | 写真図版28 平成9年度(5次)調査6 |
| 写真図版14 平成6年度(2次)調査7 | 写真図版29 平成9年度(5次)調査7 |
| 写真図版15 平成7年度(3次)調査1 | 写真図版30 平成9年度(5次)調査8 |

写真図版31	平成9年度(5次)調査9	写真図版53	瓦6
写真図版32	平成10年度(6次)調査1	写真図版54	土器1
写真図版33	平成10年度(6次)調査2	写真図版55	土器2
写真図版34	平成10年度(6次)調査3	写真図版56	土器3
写真図版35	平成10年度(6次)調査4	写真図版57	土器4
写真図版36	平成11年度(7次)調査1	写真図版58	土器5・石製品
写真図版37	平成11年度(7次)調査2	写真図版59	土器6
写真図版38	平成11年度(7次)調査3	写真図版60	土器7
写真図版39	平成11年度(7次)調査4	写真図版61	土器8
写真図版40	平成12年度(8次)調査1	写真図版62	石製品他
写真図版41	平成12年度(8次)調査2	写真図版63	経塚関連遺物1
写真図版42	平成12年度(8次)調査3	写真図版64	経塚関連遺物2
写真図版43	平成13年度(9次)調査1	写真図版65	経塚関連遺物3
写真図版44	平成13年度(9次)調査2	写真図版66	経塚関連遺物4
写真図版45	平成13年度(9次)調査3	写真図版67	経塚関連遺物5
写真図版46	平成13年度(9次)調査4	写真図版68	経塚関連遺物6
写真図版47	平成14年度(10次)調査	写真図版69	経塚関連遺物7
写真図版48	瓦1	写真図版70	経塚関連遺物8
写真図版49	瓦2	写真図版71	経塚関連遺物9・地鎮関連遺物1
写真図版50	瓦3	写真図版72	地鎮関連遺物2
写真図版51	瓦4	写真図版73	地鎮関連遺物3・創建前遺物
写真図版52	瓦5		

挿 図 目 次

- 第1図 白川金色院跡遠景(南西から・平成6年度撮影)
- 第2図 藤原氏略系図
- 第3図 梵鐘銘文(拓本)
- 第4図 金色院御堂再興勸進状(室町中期・府指定・地藏院蔵)
- 第5図 白山宮之図(江戸末期・上林清泉作・上林裕蔵)
- 第6図 白山神社拝殿(鎌倉末期・重要文化財)
- 第7図 九重石塔(鎌倉後期・重要美術品)
- 第8図 惣門(室町後期)
- 第9図 第1次調査現地説明会風景
- 第10図 第2次調査現地説明会風景
- 第11図 第3次調査発掘作業風景

- 第12図 第4次調査現地説明会風景
- 第13図 第5次調査経塚検出作業風景
- 第14図 第5次調査経塚実測作業風景
- 第15図 第6次調査現地説明会風景
- 第16図 第7次調査現地説明会風景
- 第17図 第8次調査発掘作業風景
- 第18図 第9次調査発掘作業風景
- 第19図 白川金色院跡調査専門委員会現地視察風景
- 第20図 H6-1 調査区トレンチ土層柱状図
- 第21図 SK2104実測図
- 第22図 絵巻にみる庭石(『法然上人絵伝』よりトレース一部加筆)
- 第23図 池跡部分土層断面図
- 第24図 中世坊院平面構成想定図
- 第25図 園城寺光浄院客殿(慶長6年[1601]創建)
- 第26図 3-1 トレンチ実測図
- 第27図 3-3 トレンチ実測図
- 第28図 SX4101実測図
- 第29図 SX4302・4303実測図
- 第30図 SX4104実測図
- 第31図 仏堂跡SB3401変遷図(1:200)
- 第32図 鶴林寺太子堂(一間四面孫庇付・宝形造・12世紀初頭創建)
- 第33図 工場建設時に出土した石材
- 第34図 SX5101実測図
- 第35図 SX5103実測図
- 第36図 SX5505実測図
- 第37図 6-7 トレンチ実測図
- 第38図 6-8 トレンチ実測図
- 第39図 上明地区の伝承地
- 第40図 8-4 トレンチ西壁土層断面図
- 第41図 8-5 トレンチ西壁土層断面図
- 第42図 鬼瓦実測図・写真
- 第43図 昭和57年度概報掲載軒平瓦実測図
- 第44図 近世陶磁器実測図
- 第45図 瓦経実測図
- 第46図 創建前遺物実測図1

- 第47図 創建前遺物実測図 2
- 第48図 検出遺構の時期的変遷図(アミ部分が検出地点)
- 第49図 出土遺物の時期的変遷図(アミ部分が出土地点)
- 第50図 出土軒瓦編年試案
- 第51図 白川金色院跡想定寺域
- 第52図 秋草蝶鳥鏡(●が分析箇所)
- 第53図 山吹双鳥鏡(●が分析箇所)
- 第54図 N0.1 漆膜断面 (x100)
- 第55図 N0.2 断面(x200)
- 第56図 N0.3 ①断面(x100)
- 第57図 N0.3 ②断面(x100)
- 第58図 N0.3 ④断面(x100)
- 第59図 N0.3 ③断面(x100)
- 第60図 N0.4 断面(x100)
- 第61図 N0.6 上面の断面(x100)
- 第62図 N0.6 側面の断面(x100)
- 第63図 N0.2 木口(x40)
- 第64図 N0.2 柱目(x100)
- 第65図 N0.2 板目(x40)
- 第66図 N0.3 木口(x40)
- 第67図 N0.3 柱目(x40)
- 第68図 N0.3 板目(x40)
- 第69図 福泉坊跡・閼伽井遺構出土遺物実測図
- 第70図 白川金色院惣門全景(西から)
- 第71図 白川金色院惣門平面図(左半部礎石石口位置・右半部腰長押位置、1:100)
- 第72図 白川金色院惣門断面図(1:100)
- 第73図 惣門側背面(南東から)
- 第74図 惣門西面北の虻羽(北西から)
- 第75図 惣門内部見上げ
- 第76図 舟肘木当初材拓本(1:10)
- 第77図 妻飾墓股拓本(東半部の拓本を合成して作成、1:30)
- 第78図 妻飾(南から)

表 目 次

- 表 1 地蔵院・白山神社所蔵の白川金色院関連主要文化財一覧
- 表 2 秋草蝶鳥鏡の蛍光X線強度
- 表 3 山吹双鳥鏡の蛍光X線強度
- 表 4 調査資料一覧
- 表 5 断面観察結果表
- 表 6 炭化材調査資料一覧
- 表 7 炭化材樹種同定表

I はじめに

ここに報告するのは、宇治市教育委員会が平成5年度から平成14年度の計10カ年にわたり国庫補助事業により計画的に実施した白川金色院跡の発掘調査成果である。

白川金色院は、寛正4年(1463)の『金色院御堂再興勸進状』によれば、平安時代後期の康和4年(1102)に関白藤原頼通の娘四条宮寛子(後冷泉皇后)によって創建された寺院で、本尊は大聖文殊菩薩、堂の規模は七間四面で、金でちりばめられた絢爛豪華なものであったという。しかしながら室町時代中期の長禄4年(1460)火災にあい焼失し、この再建復興のためにこの『勸進状』が作成された。後に「白川十六坊」と総称されたように、その後数多くの坊院を有する中世的寺院へと発展していったようである。しかしながら、江戸中頃には多くの坊院が消滅し、明治初年の廃仏毀釈によって廃寺となり、白山神社・惣門などのわずかな建造物を残して「遺跡」として今日に伝えられることとなった。

今回の発掘調査事業の主目的は、こうした歴史的経過をたどった白川金色院跡の遺跡の内容・保存状態・範囲などの埋蔵文化財保護にかかる基礎的データを主に収集することで、今後の史跡指定申請を十分念頭においた基礎作業でもある。この発掘調査事業は、平成5年度から平成9年度までの第Ⅰ期5カ年発掘調査事業計画と平成10年度から平成14年度までの第Ⅱ期5カ年発掘調査事業計画の2期計画で実施してきた。前半は遺跡内容の確認、後半は遺跡の範囲確認にそれぞれ重点をおいたものである。

白川金色院は、藤原頼通創建の平等院(史跡・名勝)、藤原道長創建の木幡浄妙寺跡(市立小学校内に保存)、藤原基房の別業松殿跡とともに宇治を代表する藤原摂関家関係寺院である。宇治市にはこれら一連の遺跡がそのほかにも数多く地中に眠っている。平成6年度には平等院・宇治上神社が「古都京都の文化財」として世界遺産に登録された。藤原氏関連の遺跡を保護し活用していくことは、宇治市にとっての重要な課題である。



第1図 白川金色院跡遠景(南西から・平成6年度撮影)

II 位置と環境

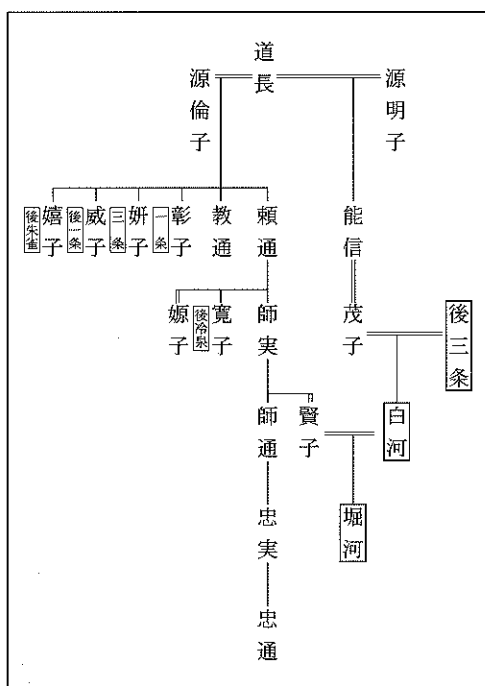
1. 地理的環境

宇治市白川は、平等院の南南東約1.5km、平等院の東に連なる標高約100mの丘陵を越えたところに位置する南北に細長い小盆地である。黒川道祐著の山城国地誌『雍州府誌』（貞享元年 [1684] 開板）には、白川は「山水幽邃の地にて誠に小桃源と謂うべし」と評されるように江戸時代には幽閑静寂な地として一般的には認識されていたようである。そのことは後述する上林清泉の『白山宮之図』からもうかがえる。

この白川谷は、長さ南北約1km、谷幅東西200~400m、谷底の標高は海拔約50m、周囲の山丘は標高約100mである。山懐に抱かれた白川谷の西寄り谷川「白川」が北流する。現在は暗渠化して谷を通る主要道路となっている。この白川を境に東西それぞれで大きく地形の状況が異なっている。西側は急峻な山丘がひかえ、白川沿いに平地部がわずかであるのに対し、東側では緩斜面が発達し、台地状となって広がっている。現在は棚田状に水田や茶畑等の耕作地として利用されている。寺跡の中心域はこの部分に展開するものと考えられる。白川谷北端の宇治川との接点部左岸に槇ノ尾山があるが、江戸時代の文献史料では別名「院御所山」と呼び、寛子の別荘があったところとされる。地元白川区では白山神社の故地であるという。頂部には土塁状の高まりが巡っており、これも金色院関係の遺構の可能性が指摘される。その他周辺の間々にも寺に関連した字名や伝承が数多くみられる。

2. 白川金色院の歴史

白川金色院は、平安時代後期の康和4年（1102）に関白藤原頼通の娘にあたる四條宮寛子（後



第2図 藤原氏略系図

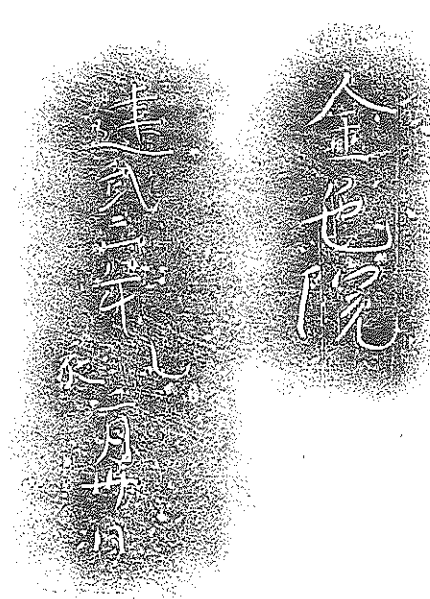
冷泉皇后)によって創建されたと伝承される。これは、室町時代中期の寛正4年（1463）に作成された『白川別所金色院勸進状』（以下『勸進状』と略す）に記載された内容であり、それ以前の文献史料で寛子創建に言及した史料は、今のところない。

一方、嘉吉元年（1441）頃成立とされる興福寺末派寺社の記録『興福寺官務牒疏』によれば、白川金色院は、加賀白山を開いた高僧越智泰澄上人と昭澄上人によって養老4年（720）に開基、四條宮寛子によって中興されたと伝えられる。開基者とされる泰澄上人は、役行者と同様に伝説的様相を多分に含む人物であり、おそらくこの記載内容は、白山神社の鎮座に由来を求めた後世の加飾と思われる。

この白川金色院に関する確実な史料で現存最古のも

のは、石山寺（滋賀県大津市）が所蔵する写經の奥書である。全部で7巻あり、意聖房・成熟房・文教房が「宇治白河別所」「白河別所」で書写したと記す。仁平4年（1154）から永暦2年（1161）までに書かれたものである。総体的には別所という名称で認識された寺院であったと思われる。別所とは本寺の退廃、墮落から逃れて信仰を追究しようとする僧侶たちが、本寺を離れて建てた寺のことを一般的に意味する。いずれにせよ、この別所という性格が、この寺の実態を考える上で極めて重要な意味をもつ。

また当該期で注目すべき史料がある。藤原忠実・忠通・基実の摂関家3代の家司として出仕した平信範の日記『兵範記』の仁平三年（1153）4月15日条で、宇治離



第3図 梵鐘銘文（拓本）

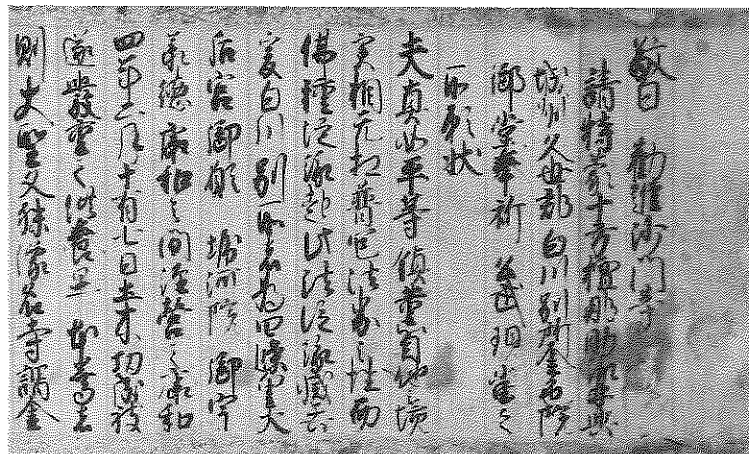
宮祭に奉仕する宇治白川等座座法師原60余人が藤原忠実から田楽装束を下賜されたと記される。離宮祭は離宮社（現宇治・宇治上両神社）の祭礼で、この藤原忠実の援助によって大いに賑っていたことが他の記録からも知られる。この『兵範記』の仁平三年条は、当時田楽衆が白川にもいたことを示すものであり、狭隘な白川盆地などから寺とは何らかの関係をもっていたであろうことは十分想起され、さらには藤原摂関家とのつながりをも示唆している。

元久元年（1204）11月25日、従一位太政大臣で氏長者でもある九条良経が、平等院参詣後に白川別所を訪れたことが、摂関家九条家の家司を勤めた藤原定家の日記『明月記』に見える。ここでも別所としての総称で記載されている。

鎌倉時代では、龍雲寺（京都府宇治田原町）所蔵の大般若經奥書が注目される。奥書に嘉元三年（1305）金色院辻坊書写とされる。「金色院」名称の史料上の初出であり、14世紀初頭の鎌倉末期には確実に『金色院』の名が使用され、また後に『白川十六坊』と総称される坊の一部がこのころには成立していたことがわかる。また時代が若干下がるが、後述する地藏院の梵鐘銘文にも「金色院」の名が鑄刻される。

年号もあり建武三年（1336）銘である。

室町時代中期の長祿4年（1460）、盗火にあつて寺が焼失したと前述の『勸進状』は伝え、この復興のため寛正4年（1463）に『勸進状』の作成や勸進が行なわれた。



第4図 金色院御堂再興勸進状（室町中期・府指定・地藏院蔵）

応仁元年（1467）、近衛家13代

当主近衛政家は、応仁の乱で騒然とする京の町を避けて宇治に約1年間疎開し、その際に白川別所を7度も巡見したことが彼の日記『後法興院記』にみられる。また所々の庭を見物したという記載内容から、おそらく坊院それぞれには庭園が存在していたと理解される。そして勧進によって寺の復興が比較的順調に進んだことがうかがい知れる。

室町時代後期の16世紀前半には、連歌師宗長が辻坊に宿泊し、たびたび連歌会を開催したと『宗長日記』には記されている。

江戸時代前期の延宝6年(1678)には再び勧進が行われたらしいことが『延宝年中勧進状』が作成されたことから理解される。江戸時代中ごろにはすでに多くの坊院が廃絶したようで、明和3年(1766)の『庄屋・年寄等訴状写』には北之坊・福泉坊・蔵之坊の3坊だけとなっている。またこのころ、村人から中之坊再興の動きが起こっている。幕末ごろの光景は、文人茶師上林清泉(1801～1870)作の『白山宮之図』からうかがい知れる。この絵図によれば、坊では福泉坊・蔵之坊の2坊だけで、堂塔では文殊堂・白山神社が描かれるだけである。絵画の中心的位置を占めるのは白山神社である。江戸時代の間白川金色院は、様々な変貌を遂げつつ維持されてきたようだ。

そして明治初年の廃仏毀釈によって廃寺となり、法灯は途絶えることとなった。以後は大きな土地改変を受けることもなく、跡地は水田や畑地などの耕作地に利用され、遺跡として残されたのである。歴史の記録に名を止めたこれら多くの坊院・堂塔の位置関係や規模等の詳細は現在ほとんどが不明となっているが、金色院鎮守社とされる白山神社の拝殿(鎌倉末期・重要文化財)や地元のシンボルの存在で廃絶後村の中心的役割を担ってきた惣門(室町後期)、寺跡の一角に



第5図 白山宮之図 (江戸末期・上村清泉作・上林裕蔵)

ある九重石塔（鎌倉後期・重要美術品）とその周囲に残る五輪塔群（鎌倉～室町期）などから、かつて存在した白川金色院という寺の有様を垣間見ることができる。

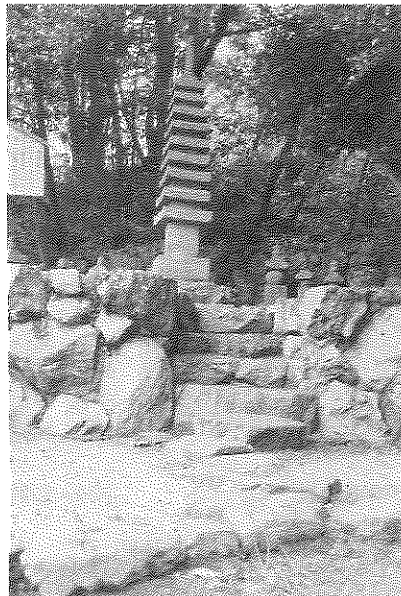
白川谷の北方に位置し、16世紀中ごろ創建とされる地蔵院（「白川十六坊」とは異にする村の惣堂、地蔵堂より発展〔現浄土宗鎮西派〕）には、下記表1に示すような仏像や經典類・先述の梵鐘などが数多く残されている。

これらは廃仏毀釈による白川金色院廃絶以降に持ち込まれたものと考えられる。

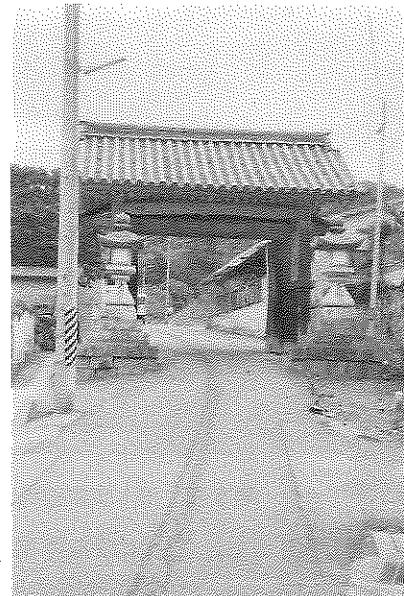
そしてこのような遺品以上に良好な状態で保全されてきたこの地域の景観が、白川金色院の有りし日を今の私たちに語りかけている。



第6図 白山神社拜殿（鎌倉末期・重要文化財）



第7図 九重石塔（鎌倉後期・重要美術品）



第8図 惣門（室町後期）

表1 地蔵院・白山神社所蔵の白川金色院関連主要文化財一覧

【地蔵院】	銅造大威徳明王像（平安後期）
銅造阿弥陀如来及脇侍像（奈良前期）	梵鐘「建武三年」銘（1336年）
銅造釈迦如来坐像（平安前期）	紺紙金泥法華経 9巻（平安後期）
銅造阿閼如来立像（奈良）	大般若経 563巻（平安後期～江戸）
板彫両界曼荼羅（平安後期）	金色院御堂再興勸進状（1463年）
木造阿弥陀如来立像（平安後期）	扁額「文永三年」銘（1266年）
木造観世音菩薩坐像（平安後期）	金銅華鬘「延宝六年」銘（1678年）
【白山神社】	
木造十一面観音立像（平安後期）	木造伊邪那美尊坐像（平安後期）

III 調査の経過と調査体制

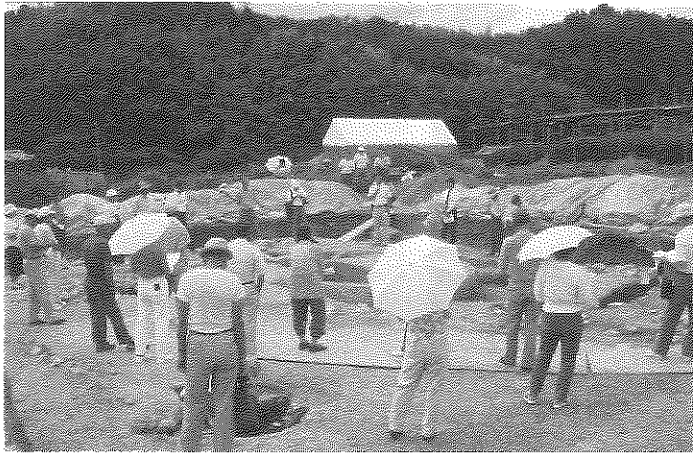
1. 調査の経過

A. 第I期5カ年発掘調査事業（平成5年度～平成9年度）

a. 平成5年度第1次調査（調査期間 1993. 7. 12～1993. 8. 30, 調査面積 310㎡）

古川悦子氏のご協力を得て宮の後5番地で実施した。福泉坊跡地である。

調査はまず重機による表土除去を開始した。表土を除去すると1-1トレンチ南東部では床土直下で黄褐色粘質土の地山を検出した。北西部では部分的に炭を含む層があり、トレンチ西端部を断ち割り土層確認したところ、少なくとも3層の火災層を確認した。最上層の火災層は15世紀後半以降と理解された。しかしながらトレンチ北東部以外は近世遺構がほぼ全面に広がっており、



第9図 第1次調査現地説明会風景

このため北東部のみ掘り下げ、中世面での調査を行った。費用・期間の制約、及び遺構の残りが極めて良いことから、掘削は中世面で止め、その後は測量・写真撮影などの記録作成を行った。

調査終盤において報道発表を行い、8月7日に現地説明会を実施した。

埋め戻しは、遺構面保護のため寒冷紗を敷き、その後掘削土砂でその

まま埋め戻した。このような作業を終え復旧したのは8月30日で、同日をもって発掘調査を終了した。

b. 平成6年度第2次調査（調査期間 1994. 10. 17～1995. 1. 13, 調査面積 350㎡）

服部明信氏・服部善一氏のご協力を得て、宮の前8番地の2・3で実施した。



第10図 第2次調査現地説明会風景

調査は、まずH6-1調査区から開始した。調査区東側でボーリング調査を行ったところ、何カ所かで石を一定の間隔で確認できた。建物の礎石である可能性が考えられたため、H6-2調査区は遺構の有無確認調査に変更し、H6-1調査区を重点的に調査することとした。H6-1調査区は重機で東側より耕作土を除去した。その結果礎石が約2m間隔

で検出された。礎石の配列から西方向にトレンチを拡張したところ、東西棟の礎石建物であることが確認できた。この検出建物南にも礎石建物の存在を、現地表面下0.35～0.5mで床土下より確認した。床土除去後は人力掘削を行い、礎石建物のほぼ全面を確認した。ボーリング調査でこの建物北でも礎石を確認したが、掘削土砂置き場の都合から確認のみに止めた。中世坊院跡が良好な状態で検出された。H6-1調査区の掘削と並行して、遺構の存在が確認されたH6-2調査区トレンチの測量を行った。H6-1調査区も遺構が完掘段階に入ってから、トレンチの測量・写真撮影を実施して記録作成した。

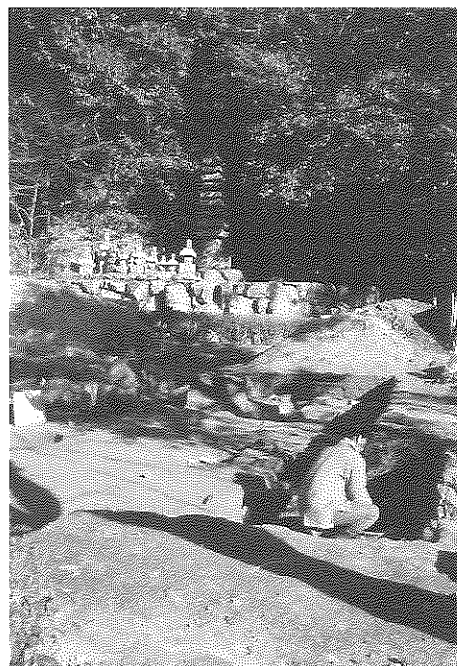
調査終盤において報道発表を行い、11月26日に現地説明会を実施した。

H6-2調査区は掘削土砂でそのまま埋め戻し、H6-1調査区は水田復旧のため、まず遺構面保護のために寒冷紗を敷き、掘削とは逆の工程で埋め戻し作業を行った。このような作業を終え、復旧したのは1月13日で、同日をもって発掘調査を終了した。

c. 平成7年度第3次調査（調査期間 1995. 11. 17～1996. 2. 5、調査面積 250㎡）

古川悦子氏・服部明信氏のご協力を得て、宮の前3番地の1、姿婆山16番地の4で実施した。

調査は、まずH7-1調査区でトレンチを計3カ所設定し、重機による表土除去を開始した。いずれも表土を除去すると、土器と遺構状の土層が確認できたためこの面で遺構確認を行った。H7-2調査区は茶畑であったため、H7-1調査区での表土除去後直ちにH7-2調査区に重機を移動させ、まず重機による茶木伐根を行った。その後表土除去を行った。除去後、炭・瓦を多く含む層があらわれ、その下に固く締まった黄褐色土層が検出されたことから、その面でまず遺構確認を行った。しかし顕著な遺構が認められず、断割で下層を確認したところ、その面下約30cmで礎石が確認された。このため、H7-1調査区は遺構の有無確認調査に変更し、H7-2調査区を重点的に調査することとした。遺構の状況をみながら可能な範囲でトレンチ拡張を行い、平安期の礎石建物が良好な状態で検出できた。H7-2調査区に先行して、H7-1調査区では測量・写真撮影を行った。H7-2調査区も遺構が完掘段階に入ってから測量・写真撮影を実施して記録作成した。



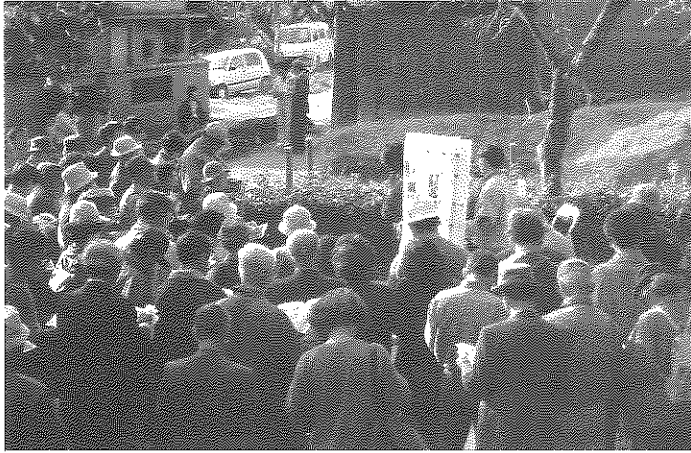
第11図 第3次調査発掘作業風景

調査終盤において報道発表を行い、1月21日に現地説明会を実施した。

埋め戻しは、H7-1調査区は掘削土砂でそのまま埋め戻した。H7-2調査区は遺構面保護のため寒冷紗を敷き、その後掘削土砂でそのまま埋め戻した。このような作業を終え、復旧したのは2月5日で、同日をもって発掘調査を終了した。

d. 平成8年度第4次調査（調査期間 1996. 8. 20～1996. 12. 4、調査面積 150㎡）

服部明信氏・中村重和氏・長村昌信氏・森川隆氏のご協力を得て姿婆山16番地4・5と宮の前



第12図 第4次調査現地説明会風景

いった。礎石建物は予想に反して小規模で一間四面の建物と理解された。調査区東端で、礎石建物の西端が検出された。礎石建物の詳細確認が主目的の一つであり、東隣りの昨年度調査区を含めて可能な範囲でトレンチを設定し全容確認の調査を進めた。

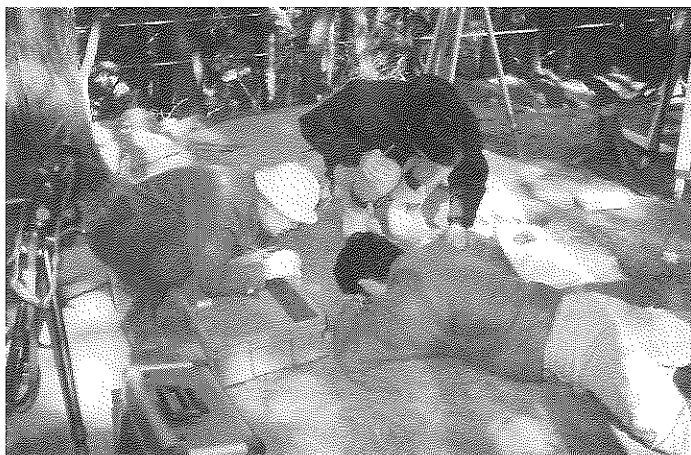
H 8 - 2 調査区は、H 8 - 1 調査区の重機掘削終了後、直ちに重機を移動して調査を実施した。表土を除去すると、その直下でコンクリート舗装道路が検出された。その関連構造物を除去すると、南側では現地表面から約 1 m 下で池の堆積層と考えられる腐植土層を確認した。トレンチ北端では断割状に約 3 m 下まで掘り下げ、内容確認を行った。H 8 - 1・8 - 2 調査区ともに遺構が完掘段階に入ってから、測量・写真撮影を実施して記録作成した。

調査終盤において報道発表を行い、11月23日に土層の現地説明会を実施した。

埋め戻しはH 8 - 2 調査区は、掘削土砂でそのまま埋め戻した。H 8 - 1 調査区は、遺構部分に限定して寒冷紗を敷き、その後掘削とは逆の工程で土砂の埋め戻しを行った。このような作業を終え、復旧したのは12月4日で、同日をもって発掘調査を終了した。

e. 平成9年度第5次調査（調査期間 1997. 11. 11～1998. 3. 5, 調査面積 350㎡）

古川悦子氏・白山神社総代小島喜三氏のご協力を得て、宮の後5番地、宮の前3番地1・3、姿婆山16番地の14で実施した。



第13図 第5次調査経塚検出作業風景

4番地の1・2で実施した。

調査は、H 8 - 1 調査区から重機による表土除去を行った。H 8 - 1 調査区はH 7 - 1 調査区の西隣りである。昨年度調査で検出した礎石建物が、当該地に続くことを昨年度グリッド調査で確認しており、このため、まずグリッドで確認した礎石を検出し、それをもとに遺構の広がり

を確認しながらトレンチを拡張して

いった。礎石建物は予想に反して小規模で一間四面の建物と理解された。調査区東端で、礎石建物の西端が検出された。礎石建物の詳細確認が主目的の一つであり、東隣りの昨年度調査区を含めて可能な範囲でトレンチを設定し全容確認の調査を進めた。

調査終盤において報道発表を行い、11月23日に土層の現地説明会を実施した。

埋め戻しはH 8 - 2 調査区は、掘削土砂でそのまま埋め戻した。H 8 - 1 調査区は、遺構部分に限定して寒冷紗を敷き、その後掘削とは逆の工程で土砂の埋め戻しを行った。このような作業を終え、復旧したのは12月4日で、同日をもって発掘調査を終了した。

e. 平成9年度第5次調査（調査期間 1997. 11. 11～1998. 3. 5, 調査面積 350㎡）

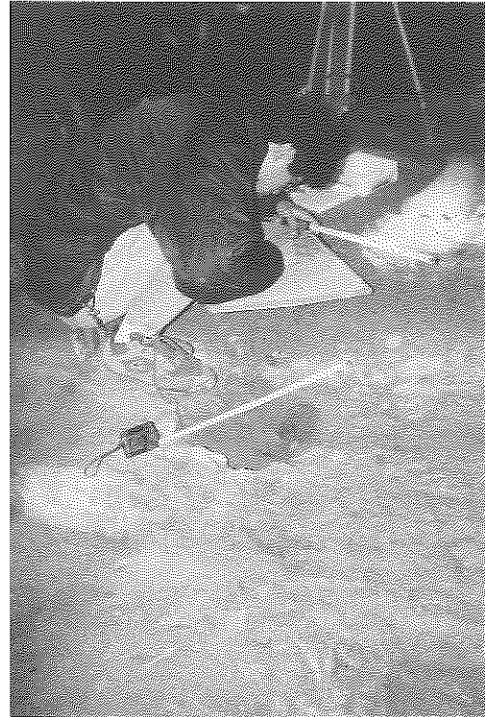
古川悦子氏・白山神社総代小島喜三氏のご協力を得て、宮の後5番地、宮の前3番地1・3、姿婆山16番地の14で実施した。

H 9 - 4 調査区は重機掘削が行えないため、人力掘削で行った。H 9 - 1 ~ 3 調査区は重機による表土除去を行った。後者は遺構有無と遺構面の確認のみ行ってから、その後一旦中止し、調査前よりすでに遺構の存在が確認された前者に調査の重点をおいた。調査中盤に白山神社裏山頂付近で経筒外容器片が表採され、このため急遽調査区を新規増設し、

H9-5調査区としてH9-4調査区と同時併行で調査を進めた。H9-5調査区では経塚関連遺構、H9-4調査区では関伽井跡が良好な状態で検出された。H9-5調査区では盗掘を考慮して調査を迅速におし進めた。遺構掘削、遺物の出土状況の測量・写真撮影の記録作成を連続的に行った。H9-4調査区は関伽井跡を中心に掘削し、遺構の状況をみながらトレンチを拡張していった。その結果、関伽井跡に続く石畳の通路や滝石組などの付属施設が検出された。

調査終盤において先に明らかとなった経塚関連遺構の報道発表を行い、2月6日に現地説明会を実施した。

その後も調査途中の関伽井跡とその他の調査区の調査を行い、完掘段階に入ってから測量・写真撮影を実施して記録作成した。関伽井跡は全容確認できなかったが、明らかになった範囲内で報道発表を行った。



第14図 第5次調査経塚実測作業風景

埋め戻しは、経塚関連遺構検出のH9-5調査区とH9-1調査区では、遺構保護のために遺構部分のみ寒冷紗を敷き、その後掘削とは逆の工程で土砂の埋め戻し作業を行った。関伽井跡検出のH9-4調査区では、遺構全体に寒冷紗を敷いて遺構保護を行い、その上に掘削土砂を薄くかけた。そのほかはそのまま掘削土砂で埋め戻した。すべての作業を終え復旧したのは3月5日で、同日をもって発掘調査を終了した。

B. 第Ⅱ期5カ年発掘調査事業（平成10年度～平成14年度）

f. 平成10年度第6次調査（調査期間 1998. 11. 19～1999. 3. 19, 調査面積 250㎡）

服部明信氏・服部善一氏・北村庄嗣氏・白山神社総代小島喜三氏のご協力を得て姿婆山16番地の14、宮の後9番地、宮の前8番地の1、植田7番地で実施した。

第Ⅱ期初年度の発掘調査は、寺南方域の調査が主である。調査は、調査地の関係上、人力掘削で開始した。調査途中宮の後2・3番地において住宅建設の連絡をいただき、緊急的に当該地の発掘調査を小規模ながら実施した。H10-5調査区とした。



第15図 第6次調査現地説明会風景

H10-1調査区は昨年度からの

継続調査で、関伽井跡の調査である。今年度調査は関伽井北の窪地部分で実施した。調査の結果、窪地は想定したような単純な池跡ではないことが明らかとなった。H10-2 調査区では現地表面下約0.4mで地山が検出され、その面で柱穴痕が確認された。このため可能な限りトレンチ拡張を行った。H10-4 調査区は、遺跡南方の広がりを確認するために設定した調査区で、湧水が著しく遺構の存在は明らかにできなかったが、瓦や土器等の遺物が少量出土し、周囲に遺構の存在が想定された。H10-3 調査区は、平成6年度に検出した中世坊院跡の東隣りの小平坦面で、遺構検出の可能性が低いと思われた地点である。人力掘削によるグリッド調査で遺構有無の確認を行ったところ、予想に反して焼土層や土器類が検出された。このため急遽重機を導入し、面的調査に変更し調査を行った。その結果、新旧2時期にわたる平安後期から鎌倉期にかけての礎石建物が良好な状態で確認された。焼土が部分的に2層みられたため、地区割りし、地区ごとに漸次掘り下げた。H10-5 調査区は時間の関係上、十分な調査はできなかった。

測量・写真撮影の記録作成は、遺構の全容が概ね明らかとなった時点でそれぞれ行った。

調査終盤の3月10日に報道への発表を行い、3月13日に現地説明会を実施した。

埋め戻しは、遺構保護のため良好な部分のみ寒冷紗を敷き、その後掘削とは逆の工程で土砂の埋め戻し作業を行った。すべての作業を終え、復旧したのは3月19日で、同日をもって発掘調査を終了した。

g. 平成11年度第7次調査（調査期間 1999.10.20～2000.3.17, 調査面積 450㎡）

桂久男氏・地蔵院代表役員福本哲了氏・辻喜代一氏・北村昌子氏・山中登氏・古川悦子氏・村田源造氏・服部善一氏・服部明信氏・古川治氏・上村巖氏・中村重和氏、白山神社総代の小島喜三氏のご協力を得て鍋倉山1番地・10番地の1・2、宮の前3番地の1・8番地の2、植田10番地・17番地の1・21番地・21番地の1、上明3番地、東山8番地で実施した。

この年から、学識者6名で構成される白川金色院跡調査専門委員会を組織し、12月3日に委員会を開催した。この中で、寺域の広がりについては谷部分のみならず丘陵部における遺構確認が特に必要であることなど、専門的な指導を受けた。

発掘調査はこれらの指導を踏まえながら、寺跡中心域での遺構の残存状況の確認、丘陵部にお



第16図 第7次調査現地説明会風景

ける遺構の存否確認、寺域南限の確認、および白川地区から丘陵を南に越えた上明地区での坊院伝承地の状況確認を目的として実施した。

調査地の関係上、いずれも人力掘削で行った。H11-5 調査区では『勸進状』に示す焼亡・再興の状況が明らかとなり、H11-1・3 調査区では南限に一定の方向性があった。

調査終盤に報道発表を行い、3月

11日に現地説明会を実施した。

埋め戻しは測量・写真撮影が終了したところより、掘削とは逆の工程で土砂の埋め戻し作業を行った。すべての作業を終え復旧したのは3月17日で、同日をもって終了した。また3月16日には文化庁文化財調査官の現地視察を受け、今後の進め方について意見交換を行った。



h. 平成12年度第8次調査（調査期間 2000.11.7～2001.3.16, 調査面積 300㎡）

服部明信氏・古川要氏・古川三郎氏・中村重和氏・北村昌子氏・北村彦治氏・辻喜代一氏のご協力を得て川下14番地の1、川上り谷78番地の1、宮の後15番地の1、鍋倉山3番地、植田15番地・17番地の1・19番地の2・18番地で実施した。



第17図 第8次調査発掘作業風景

平成10・11年度と都合2カ年にわ

たって寺城南限を確定するための調査を実施した。しかしながら南限確定にはさらに詳細な情報が必要と考えられた。したがって平成12年度は、当初目的の北限確定調査と共に平成11年度に引き続き、南限の確定調査を行った。調査は、調査地の関係上、基本的に人力掘削によって行った。北限部は、寺跡中心域から北に下っていく棚田状の比較的広い平坦部で実施した。調査は、平坦面が広いところから順次進めていった。南限部は調査区を2カ所設定し、実施した。H12-4調査区では小丘陵頂部(平坦面)と、石製五輪塔片がかつて表採された地点とを中心に調査を行った。トレンチは遺構・遺物の状況をみながら設定した。H12-5調査区は小さな棚田が数多く広がる地域で、トレンチは中でも比較的広い平坦面を中心に設定した。調査の結果、寺域の北限・南限ともに概ね推定できるに至り、2月22日に白川金色院跡調査専門委員会を開催し、一定の合意を得た。

埋め戻しは、測量・写真撮影などの記録作成を行ったトレンチから、随時行っていった。すべての作業を終え復旧が完了したのは3月16日で、同日をもって発掘調査を終了した。

i. 平成13年度第9次調査（調査期間 2001.10.18～2002.2.22, 調査面積 150㎡）

藤川昌子氏・服部明信氏・古川伍美氏のご協力を得て宮の前6番地の1、宮の後11番地、川上り谷45番地の1・2・75番地の1、姿婆山13番地で実施した。



第18図 第9次調査発掘作業風景

この年度の発掘調査の主目的は、寺域西限の確認であった。調査は、惣門を通り南北に細長く延びる段丘崖が寺域の西限確定要素となる可能性を考え、段丘崖を基本にその西・東に調査区を計4カ所設定し実施した。調査は調査地の関係上、人力掘削によって行った。このためトレンチは小規模にして、調査区内に複数のトレンチを設定して、成果の効率化に努めた。調査の結果、

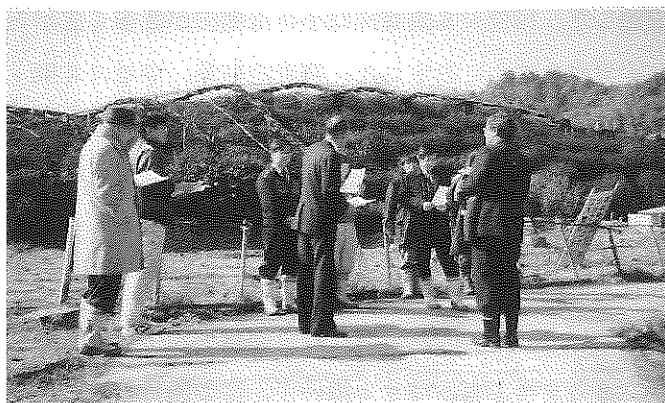
予測どおり段丘崖が寺域の西限を区切ると判断でき、1月31日に白川金色院跡調査専門委員会を開催し一定の合意を得た。また討議では、史跡指定の理念を十分踏まえた上で遺跡範囲を考える必要があるなどの専門的なご指導を数多く受けた。現地作業の終盤は、委員会から指摘された点についての確認調査を行った。それらのめどがついた段階で測量・写真撮影の記録作成を行い、記録作成が終了したトレンチから埋め戻しを行った。

すべての作業を終え復旧が完了したのは2月22日で、同日をもって発掘調査を終了した。

ⅰ. 平成14年度第10次調査（調査期間 2002. 11. 14～2003. 2. 27, 調査面積 120㎡）

藤川恭子氏・上村巖氏・菱田嘉明氏・古川トシノ氏・服部善一氏・桂久男氏・中村重和氏・服部幸子氏・柴田信和氏・石川善久氏のご協力を得て宮の後16番地の1・17番地・18番地・19番地、娑婆山15番地の1、東山7番地の1～2・9番地・10番地の1・11番地、鍋倉山6番地の1・38番地で実施した。

最終年度にあたるこの年の発掘調査の目的は寺域の東限確定であった。東限は山間部がその対象地であり、広範囲にわたることから、まず最初に踏査を行い、遺構が確認できそうな地点を探し出すこととした。その後その成果に基づき調査区を計5カ所設定した。調査は人力掘削で行い、小規模なトレンチを複数設定して成果の効率化に努めた。調査は北から順に南へと移動して進めた。各トレンチとも完掘し測量・写真撮影などの記録作成が終了したところから、随時埋め戻しを行った。各



第19図 白川金色院跡調査専門委員会現地視察風景

調査区とも顕著な遺構・遺物が認められなかったため、東限は設定した各調査区にまでは及ばないものと推察された。

すべての作業を終え復旧が完了したのは2月27日で、同日をもって発掘調査を終了した。3月19日には白川金色院跡調査専門委員会を開催し、これまでの成果とあわせて寺域の四至における事務局提案に一定の合意をいただいた。なお委員

会では今後の課題についてもご指導いただいた。そして委員会を解散した。

2. 調査体制

第Ⅱ期5カ年発掘調査事業の初年度である平成10年度に、組織の機構改革により文化財保護係が社会教育課から歴史資料館に移管することとなった。

第Ⅰ期5カ年発掘調査事業（平成5年度～平成9年度）

発掘主体者	宇治市教育委員会		
発掘責任者	宇治市教育委員会	教育長	岩本 昭造（～9.10.12） 谷口 道夫（9.10.13～）
発掘担当者	同	社会教育課 文化財保護係	杉本 宏 荒川 史 浜中 邦弘 吹田 直子
発掘事務局	宇治市教育委員会	参事	池田 正彦（～8.3.31） 岡本 茂樹（8.4.1～） 堀井 健一（～7.3.31） 細川 芳郎（7.4.1～8.3.31） 小西 吉治（8.4.1～9.10.15）
	同	社会教育課長	吉水 利明 山本 敦子（～7.3.31） 加藤きみ江（7.4.1～8.3.31） 日原 洋子（8.4.1～）
	同	社会教育課 文化財保護係長	
	同	主任	

第Ⅱ期5カ年発掘調査事業（平成10年度～平成14年度）

発掘主体者	宇治市教育委員会		
発掘責任者	宇治市教育委員会	教育長	谷口 道夫
発掘担当者	同	宇治市歴史資料館文化財保護係	杉本 宏 荒川 史 浜中 邦弘 吹田 直子（～13.3.31）
	同	参事兼宇治市歴史資料館館長	源城 政好（～14.3.31） 五艘 雅孝（14.4.1～）
	同	歴史資料館主幹	吉水 利明
	同	歴史資料館館長補佐	岡井 毅芳

調査参加者 足立千春・新井朋哉・荒木浩一・岡本智子・奥里子・小谷紗代・河村亜由美・北澤英子・久保千恵子・黒石昌代・黄嘉慧・黄基玉・小林俊之・斉藤眞吾・坂本浩一・佐野和恵・志村みどり・瀬古正志・高橋玄太・竹田涼子・時実奈歩・中井淳史・中村幸代・西田倫子・西村恵祥・畑陽子・堀大介・松村英之・宮川千代実・宮崎一弥・山下睦（真奈）・山下由香・吉田椋善・山中繁・和田妙子

白川金色院跡調査専門委員会

平成11年度より遺跡の学術的評価を付加していただくため委員会を設置した。以下の体制で平成14年度の最終年度まで運営した。

- [委員長] 狩野 久（京都橘女子大学）
[副委員長] 中川恵次（宇治市文化財保護委員長）
[委員] 上原真人（京都大学）
山岸常人（京都大学）
仲 隆裕（京都造形芸術大学）
西山良平（京都大学）

ご協力いただいた方々 10年間に及ぶ発掘調査期間中に下記の方々から専門的なご指導・ご教示ならびにご協力をいただきました。記して感謝を表します。順不同、敬称略。

足立佳代・有井広幸・飯村均・石田裕二・伊東史朗・伊藤延男・稲田孝司・井上正・井上智代・磯野浩光・磯村幸男・伊野近富・今井敦・牛川喜幸・梅村敏明・大澤伸啓・大畑忠・太平聡・大道和人・大三輪龍彦・小野山節・朧谷壽・加藤允彦・金子裕之・金丸義一・神山昌子・亀井明德・川上貢・河野眞知郎・川畑聰・河原純之・上林裕・菊川泉・菊池徹夫・岸本直文・木下尚子・小池伸彦・小泉裕司・小林三郎・小林康幸・斉木秀雄・坂井秀弥・佐藤晃一・清水擴・鋤柄俊夫・杉原和雄・（故）杉山信三・杉山洋・鈴木嘉吉・須藤隆・角谷江津子・平良泰久・高橋康夫・高橋與右衛門・高橋美久二・田中哲雄・辻本和美・（故）堤圭三郎・出川哲朗・富家俊明・中島正・中谷雅治・鍋田勇・西田健彦・西谷正・西村謙司・野村恵子・萩原芳定・橋本清一・宝珍伸一郎・橋本久和・長谷川行孝・服部正吉・馬場悠男・波部健・浜中有紀・原廣志・藤井学・福田俊朗・福田誠・藤田勝也・藤本孝一・堀内明博・堀裕・本澤慎輔・町田章・南孝雄・村木二郎・宮川禎一・三宅睦子・元木泰雄・本中真・森幸三・森正・森下衛・八重樫忠郎・山口博・吉田享盛・和田勝彦・足利市教育委員会・大津市教育委員会・勝山市教育委員会・鎌倉市教育委員会・熊本市教育委員会・ひたちなか市教育委員会・平泉町教育委員会・中世瓦研究会・文化庁・京都府・京都府立山城郷土資料館・（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター・東大寺・東福寺・平等院・地藏院・白川区

IV 発掘調査

ここで報告するのは、平成5年度から平成14年度までの計10カ年にわたる発掘調査の成果を年次毎にまとめたものである。ここでまとめた発掘調査成果の中心は検出遺構であり、出土遺物については次章で報告する。出土遺物については年次毎に説明するよりも、遺物全体の様相を把握した方が、遺跡を理解していく上で最も効果的であると判断した。

なおこれまで年次毎に概報を作成し成果を公表してきたが、今回、全体をまとめて再整理していく中で、遺構の計数や解釈について修正を加えたものがある。

1. 第I期5カ年発掘調査事業（平成5年度～平成9年度）

平成5年度から平成9年度までの都合5カ年にわたって、白川金色院跡の内容確認を主目的とした発掘調査計画を実施した。調査が入る前の遺跡状況は廃仏毀釈をまぬがれた惣門・白山神社・九重石塔などがわずかに残るだけで、遺跡そのものは「廃墟」とも呼べる状態であった。しかしながらこの遺跡が辿ってきたその歴史的歩みは、現在の地形や周辺の景観から十分うかがい知ることができる。地形は廃絶前の状況を残し、水田・畑といった耕作地として利用されている。さらに市街地から近距離にもかかわらず、その景観はほぼ変わらず保全されてきた。その有様は遺跡の価値としては一級資料といえ、また藤原氏関係遺跡という面からもその重要度は高い。

調査は、現在残る建造物・絵図・現地地形・昭和55年度発掘調査成果等を参考としながら、遺構が最も良く残ると想定される地点（福泉坊跡）を初年度に実施し、以後はそれぞれ前年度までの調査成果を鑑みて調査地点を設定した。

なお、この計画的発掘調査事業に先立って、白川区集会所建設に伴って発掘調査を昭和55年度に実施した。調査では池跡が確認され、平安後期（創建期）にまで溯る可能性が指摘された。

A. 平成5年度（第1次調査）

a. H5-1調査区1-1・2トレンチ（図版3～5、写真図版6・7）

調査区は廃絶時まで存在した福泉坊の跡地で、遺存状況が最も良いと考えられた。

土層の状況 耕作土・床土を除去すると、遺構面が検出された。現地表面下0.3～0.5mと浅い。東部は黄褐色土の地山で、西部では盛土造成である。北西部では部分的に炭を含む層があり、トレンチ西端部で断割を行ったところ、少なくとも3層の焼土層がその中で確認できた。また、北西隅では遺構面下約0.7mで地山層が確認されたものの、そのほかで約1.5m下げたが地山層は認められなかった。以上から、調査区は西から東に傾斜する谷状地形で、それが建物の火災等を契機に徐々に低い部分が埋め立てられて平坦地化したと考えられた。これらは各遺構面を形成しているものと判断されるが、保存目的の調査であり、また近世遺構が土層で良く残っていることから、近世遺構の認められない範囲で、中世以前の遺構検出を可能な限り行った。

S K 1101 直径約3m、深さ約1mの円形状の土壌である。埋没後、直径1.2mに縮小して掘

り直されている。埋土からは近世瓦が多量に出土している。素掘りの井戸か、もしくは水を溜め置く施設であろうか。

S K 1103 暗渠溝で南側が切られ南半部は不明だが、直径約1.7m、深さ50cmの円形状の土壙と考えられる。土壙内から土師器皿を主にコンテナ10箱程度の土器類が出土した。土師器は完形品が多く廃棄土壙と考えられる。土師器以外には東播系鉢や漆器などがある。

S K 1104 南北1.4m、東西0.9m、深さ50cmの土壙である。埋土から河内向山系軒平瓦が出土した。

S K 1105・1106 S K 1110を切って掘り込む円形状の土壙である。直径0.6~0.8m、深さ約30cmを測る。

S D 1109 南北3m、東西0.4~0.9mを測る溝である。

S K 1110 南北3.2m、東西2.2m、深さ約20cmの不定形の土壙である。

S A 1120 南北に等間隔に並ぶ柱穴3つがあり柵列状のものを想定した。柱穴掘り方は円形で直径30cm、柱穴の直径は約10cmを測る。柱穴間は約1.5mである。

S K 1121 南北4.2m、東西約2.5mに想定される南北に長い長方形の土壙である。東壁面は石を2段から3段に積んでいる。高さは0.4mである。その石組前面からは多量の石材が出土し、本来の石組はさらに数段高いものであったと考えられる。南側も石組を2段に積んでいる。北側は石組を持たない。西側は暗渠溝に切られ不明である。埋土には石材とともに炭化物を含む。小規模な園池の可能性が考えられるが、現段階では確定できない。

S X 1122 南北2列に並ぶ石列である。西側に石の面を揃えて、長辺を南北方向に向けて配する。建物に付随する地覆石であろうか。

落ち込み 前述した谷状地形は、中世期ではトレンチ北東部から南西方向に向かう溝状の落ち込みとして把握できた。この面より出土した土師器から15世紀後半と考えられる。この溝状の落ち込みは、南側ラインのみ検出したが、直線的ではなくかなり変化のある状況を示している。また小規模な溝が合流したり、所々に礫が置かれたりするなどの状況から、溝状の地形を利用して庭園が作られていた可能性も考えられる。

これら各遺構は中世期と近世期に大別できる。中世期の遺構はS K 1103・S K 1104・S K 1105・S K 1106・S D 1109・S K 1110などで、近世遺構の希薄なトレンチ西側で主に検出している。近世期の遺構はS K 1101・S A 1120・S K 1121などである。

小結 第1次調査では、中近世期の遺構面のみ調査で終了した。しかし下層から3面以上の遺構面が確認されるなど、各遺構が良好に残っていることが明らかとなった。また平等院で康和年間修理瓦とされる河内向山系軒瓦が出土したことは重要であろう。このことは『勸進状』が示す康和4年という創建年代とも合致し、さらに河内向山系瓦のもつ歴史的背景から藤原氏との関係が類推でき、『勸進状』の記載内容の信憑性が高まってきた。あくまで伝承の域を出なかった白川金色院が、この発掘調査で歴史的事実である可能性を大いに高めることとなった。

B. 平成6年度（第2次調査）

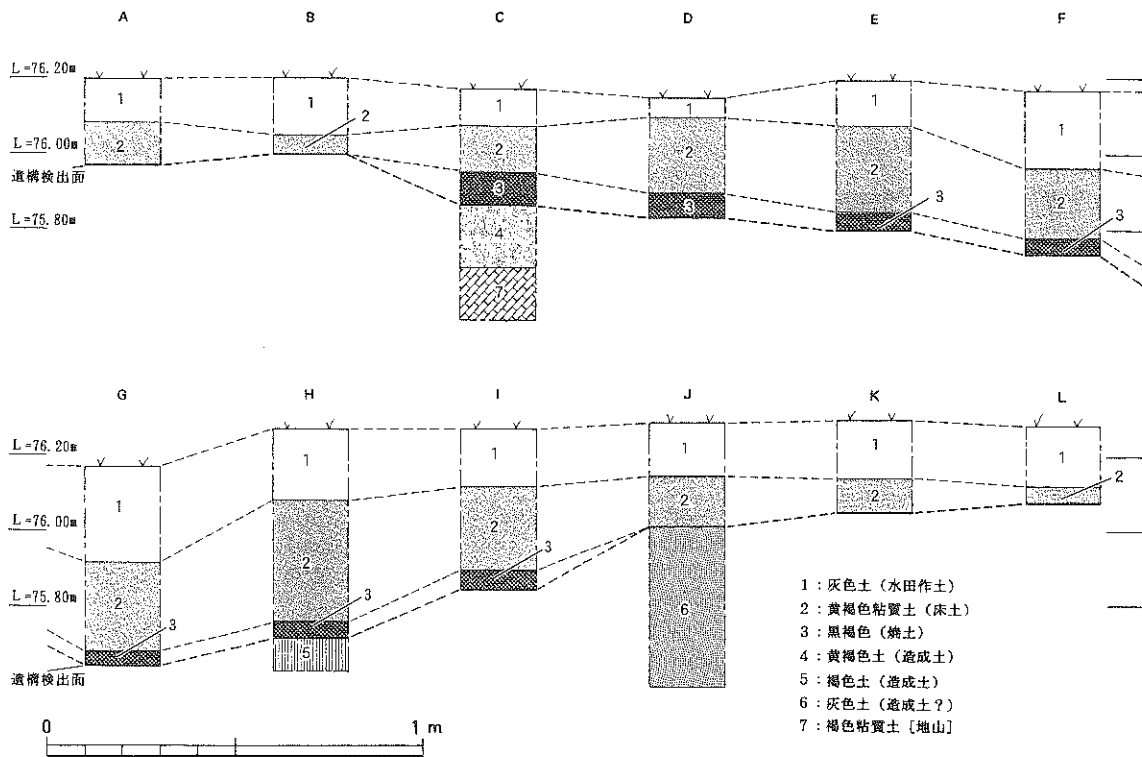
平成6年度の発掘調査目的は、白川金色院中心域（参道付近）の南に広がる棚田中で、坊院の存在が推測できる比較的大きな平坦地2カ所で実施した。

a. 6-1調査区2-1・3トレンチ（図版3・4・7・8、写真図版8～13）

土層の状況 遺構検出面は標高75.7～76.0mで東から西に向かって緩傾斜する。現地表面下から約0.2～0.5mである。東側では遺構面が現地表面から浅く、耕作土を除去すると直ちに遺構が検出された。西側では西方向に遺構面が傾斜しているために、西に向かうに従い床土が遺構面を覆い始め、さらにその下厚さ約10cmの黒褐色土層が遺構面を覆っている状況であった。

出土遺物は床土内にも若干含まれるが、大半は黒褐色土層からである。黒褐色土層と床土との間に腐植土層が薄く堆積し、また腐植した竹の根が遺構面を覆っていた。後述する中世坊院の廃絶後に一時期炭焼き窯などに利用されたが、地元の方の話によれば、かつて竹林であったという。現在の水田になったのは比較的新しい。

遺構基盤土は、基本的には大半が褐色土であるが、東側では一部に小礫を含む土層もみられ、その土層には若干の土器が含まれていた。調査の最終段階に2-1・2-3トレンチの北端部を一直線上に東西に細長い断割を設定した。2-3トレンチでは、遺構面下約20cmで地山が東西ほぼ水平に確認された。2-1トレンチでは、東端が遺構面下約20cm、西端が遺構面下約50cmで確認された。土層の状況からこの地山層が造営前の旧地形を示していると考えられた。こうした状況から、東から西に向かって傾斜する斜面地（地山）に褐色土の盛土をし、坊院造営が可能な幅広い平坦面を雛段造成して、坊院が造営されたと理解した。盛土から遺物が若干出土したが時期



第20図 H6-1調査区トレンチ土層柱状図

確定には至らなかった。

S B 2101 今回検出した中世坊院の中心的建物である。H 6 - 1 調査区の中央やや北寄りに位置する。平面的にはL字形構造をとる建物で、絵巻物にしばしば描かれる主殿に中門廊が付設する建物（主殿造）と同様のものである。個別に説明する。

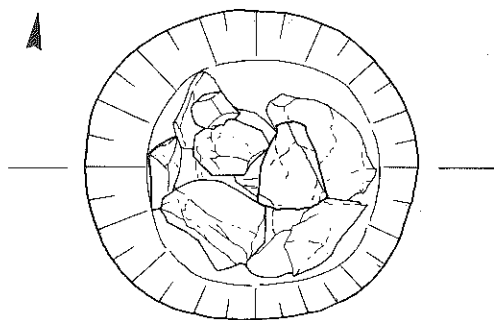
主殿 この建物の中心となる母屋に相当する。北側と西側には縁石がみられ縁が取り付く。南側と東側の縁石は不明である。母屋の礎石は正面にあたる西側一列目が最も良く残り、それによると桁行5間以上である。梁間は縁石から2間以上で実態は不明である。礎石間は基本的には2m (6.5尺) である。また礎石間のほぼ中央には東石が配される。礎石の材質はチャート質と砂岩であり、偏平な自然石を選別して利用している。

中門廊 主殿の南西部から西方向にほぼ直角に張り出す廊である。約2.75mの長さで廊の北側礎石列を確認した。この廊は軸線が主殿の軸線と微妙にずれ、増改築による可能性も考えられる。ボーリング調査と一部拡張を行い、対になる南側礎石列を調査したが、確認することはできず北側礎石列より約5m南で南側への落ち込みが認められた。廊の幅はこの地点で納まるものと想定され、1間ないし2間と考えられた。礎石の材質はチャート質と砂岩で、偏平な自然石を選別して利用している。

雨落ち溝 主殿正面西側にあり、石組が良く残っていた。雨落ち溝の幅は約0.5mで主殿の縁石とほぼ接する。石組を構成する石材は、溝側のみ加工して揃えている。

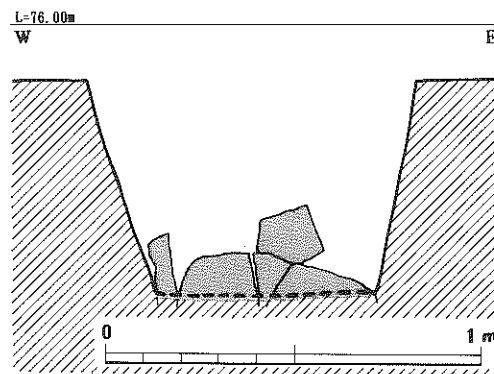
石畳A 東西長5.90m、南北幅0.75mで、西側から主殿に向かって真っ直ぐ伸び、主殿正面の雨落ち溝に取り付く石畳である。この建物のメイン通路である。直径約30~40cmのチャート質・

砂岩の板石を使用している。なおこの石畳の西に自然石が飛び石状に1個配されている。

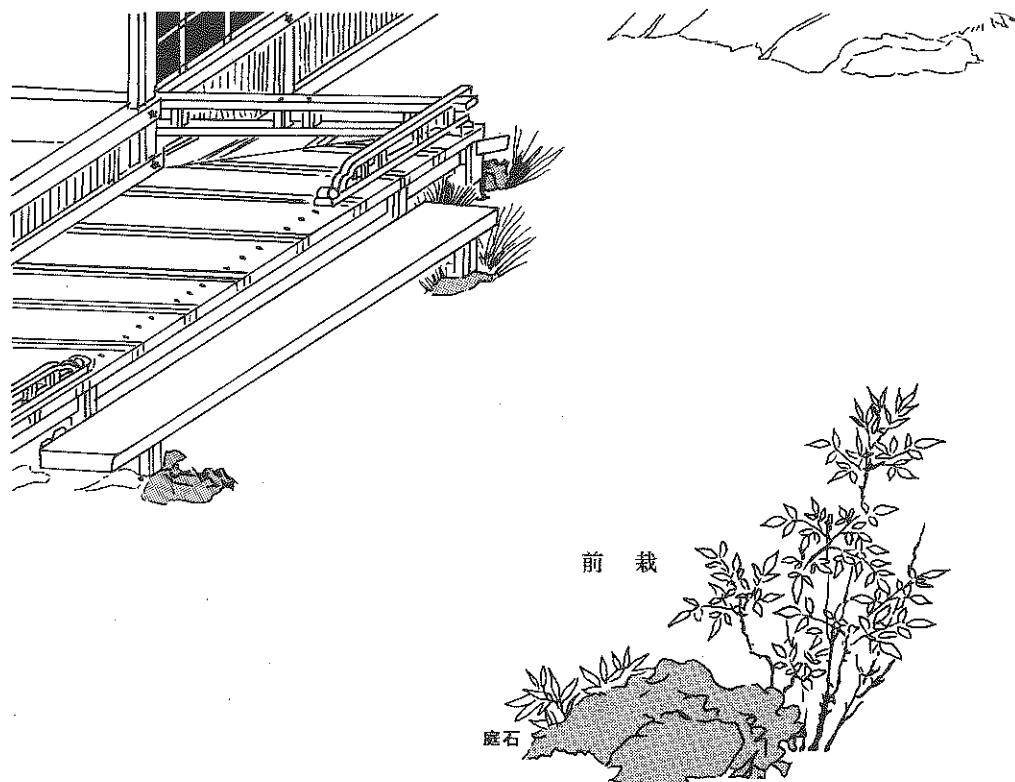


石畳B 主殿に北接する形で雨落ち溝から東に向かって伸びる石畳である。ほぼ完存で東西長2.80m、南北幅0.75mで、直径約40cmのチャート質・砂岩の板石を使用している。

SK2104 石畳Bの東側で検出された直径0.9mの土壌である。検出面から約60cm掘り下げると直径約30~40cmの割石が9個確認された。これらを除去したが、下層には何もなかった。現状では湧水が確認できないことから便所遺構の可能性を指摘しておきたい。いずれにせよ石畳Bはこの土壌へと通ずる道路といえる。主殿北側縁石から北約1.40mのところには二つの石が土壌を挟んで配されており、庇のようなものでこの場所は覆われていた可能性がある。



第21図 SK2104実測図



第22図 絵巻にみる庭石（『法然上人絵伝』よりトレース一部加筆）

小石敷 雨落ち溝石組西列の南端で検出した。直径約10cmの小粒の丸石を充填する。主殿と中門廊との屋根の交差点直下からややずれる。手洗い場用に小石を敷き詰めたものか。

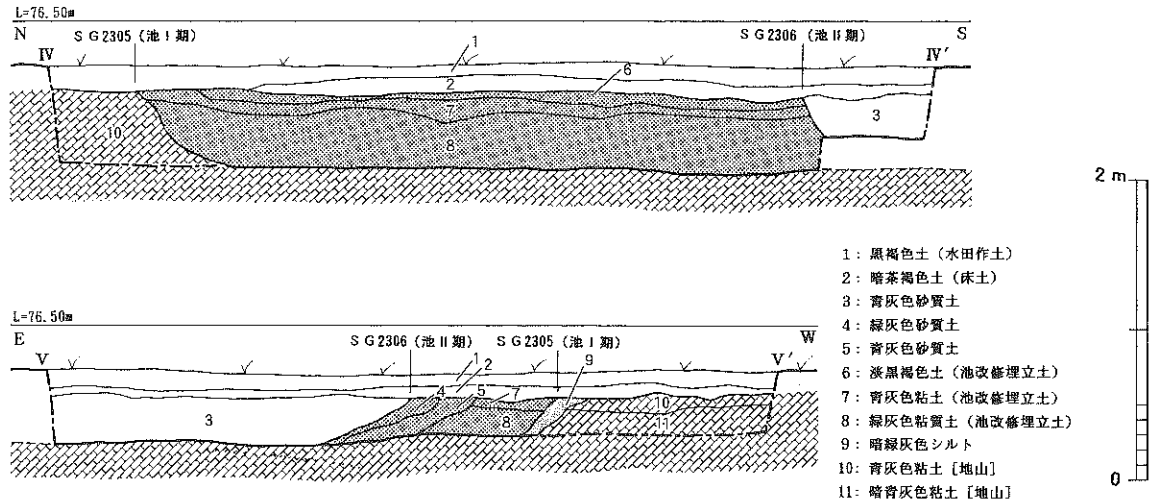
礫溜り 小石敷の南側に大小様々な礫が集積していた。使用石材を投棄したものか。

庭石 S B 2101正面からみて左手の空閑地に小振りな立石を検出した。材質はチャート質で、地盤に埋めこまれている。前栽に添えられた庭石であろう。

S B 2102 調査区北側で検出した東西棟の礎石建物である。礎石は一部欠失するがほぼ完存する。梁間2間（4m）、桁行10間（20m）である。礎石間は6.5尺（約2m）である。礎石はチャート質・砂岩で大半が自然石であるが、一部に割石を使用している。建物の南西には縁がとりつき、チャート質・砂岩の縁石が約3.75mの間隔で南側礎石列から約1m離れて3個配される。西端礎石列の北延長線上約1mのところに直径約35cmのチャート質の自然石が置かれる。その性格は不明である。東端から数えて3間目の梁間中央に東石が置かれている。S B 2102はS B 2101の付属屋であろう。建物の軸線はS B 2101と同じである。

S B 2103 S B 2101から約20m南側でボーリング調査によって礎石を6個確認した。礎石間は不統一であり、定かではないがいずれにしる地形的制約上それほど大きな建物にはならないであろう。この建物もS B 2101の付属施設であろう。検出した礎石はいずれも直径約30cmのチャート質と砂岩の自然石で他の建物と同一である。

S B 2101とS B 2103間ではボーリング調査では礎石を確認できなかった。建物、園池等が接して配される本坊院内において、一定の広がりをもった空閑地として考えられる。平坦面全体としてみれば建物は北側に集中している。



第23図 池跡部分土層断面図

S G 2305・2306 池岸の一部をS B 2102南側で検出した。S B 2101背後は現在も湿潤で調査以前から建物の想定は困難であった。この池岸との関係から湿潤地帯が概ね園池の範囲になるのであろう。池は2時期あり、古い方を池I期 (S G 2305)、新しい方を池II期 (S G 2306) とした。池I期はS B 2102の建物と一部重複している。このことと雛段造成のことを踏まえると、この坊院創建当初時のS B 2102は東石と判断したところまでの桁行7間 (14m) の建物で、後に東側へ増改築した結果、園池は縮小されたものと考えられる。

小型炭焼き窯 2-1トレンチ南西隅で検出した。割れた平瓦を円形状に積み重ねて壁面を作り、東側に張出をもつ。後世の小型炭焼き窯であると思われる。

b. H 6-2 調査区 2-2 トレンチ (図版 3・4・6、写真図版 8・14)

この調査区は、遺構の有無を確認するに止まり、遺構の全容を追及していない。

現在は休耕田であるが、以前は水田として耕作されていたようで、現地表面下約0.2mまでが青灰色層で耕作土であることが確認できた。その下約0.05mを床土の黄褐色土層がトレンチ西半分を薄く覆っていた。それらを除去すると、トレンチ西寄りでは遺物を含む黄褐色砂質土層があり、それより東側はすでに地山が露出していた。地山面では顕著な遺構を検出することはできなかった。この黄褐色砂質土層を除去すると遺構面が表われ、礎石2個を検出した。遺構面上で土器が若干出土したが時期不明である。南壁土層断面から、遺構面はトレンチ西端から東5m付近で急激に立ち上がる。礎石は低い地点での検出である。トレンチの東端では地下水位が高いため地山が青灰色にグライ化していた。礎石は約20cmの小振りの扁平な自然石で、材質はチャート質である。建物の規模・構造は不明である。

小結 今年度の発掘調査では中世坊院が非常に良好な状態で確認された。また中心域より南のかなり離れたところから出土したことは白川金色院の寺域の広がりを考える上でも重要であった。最後にこの中世坊院について簡単にまとめておく。

中世坊院について S B 2101が採用する「主殿造」については後述し、まず遺構全体について整理する。今回の発掘調査で明らかとなった坊院内の建物・庭園の配置状況を整理すると概ね次

のように考えられる。

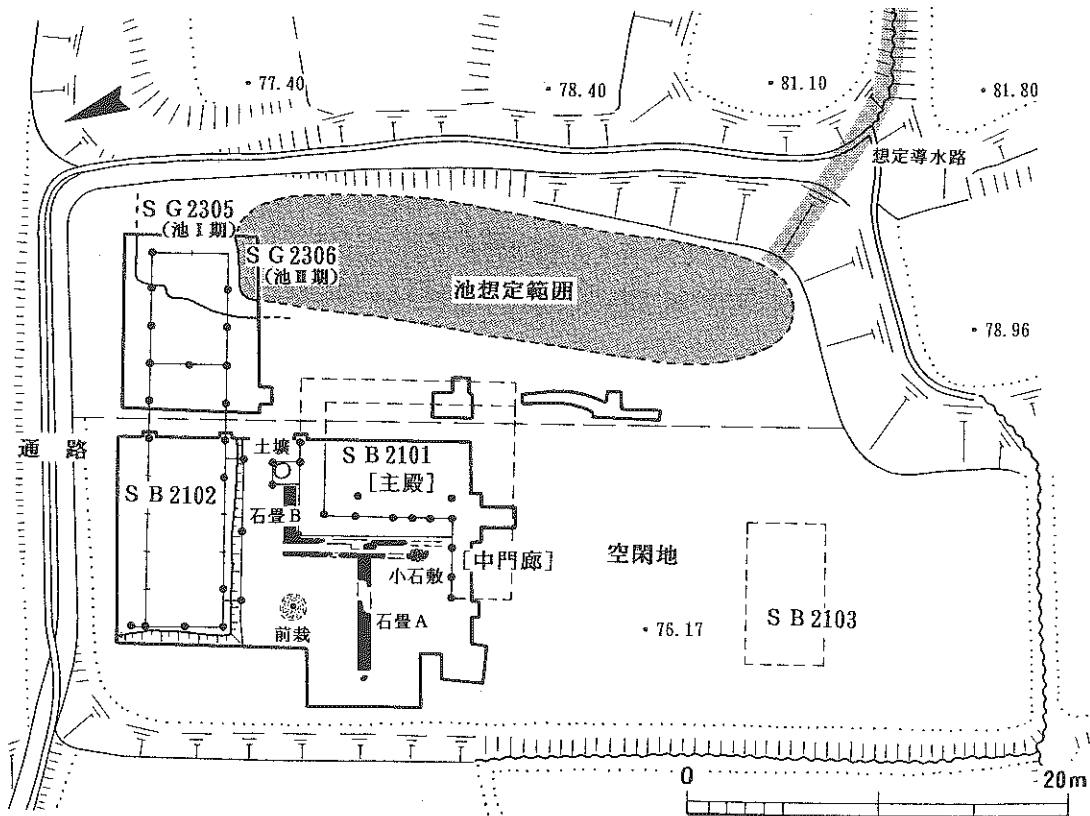
坊院内の建物は、主殿造の母屋を中心として、そのすぐ北側とやや離れて南側に各1棟の付属屋が配置され、概ね3棟によってこの坊は構成されていたようである。

坊院の敷地は、この南北に並ぶ建物群によって東西に二分され、西の前面部は母屋に続く石畳や前栽が配置されていることから、前庭として利用された空間であったと考えられる。建物背後部と崖面との間は、地形に沿う南北に細長い池を中心とする池庭の空間となる。建物S B 2102の東間仕切3間(6m)の増改築部分が池岸北に臨むのは注意したい。

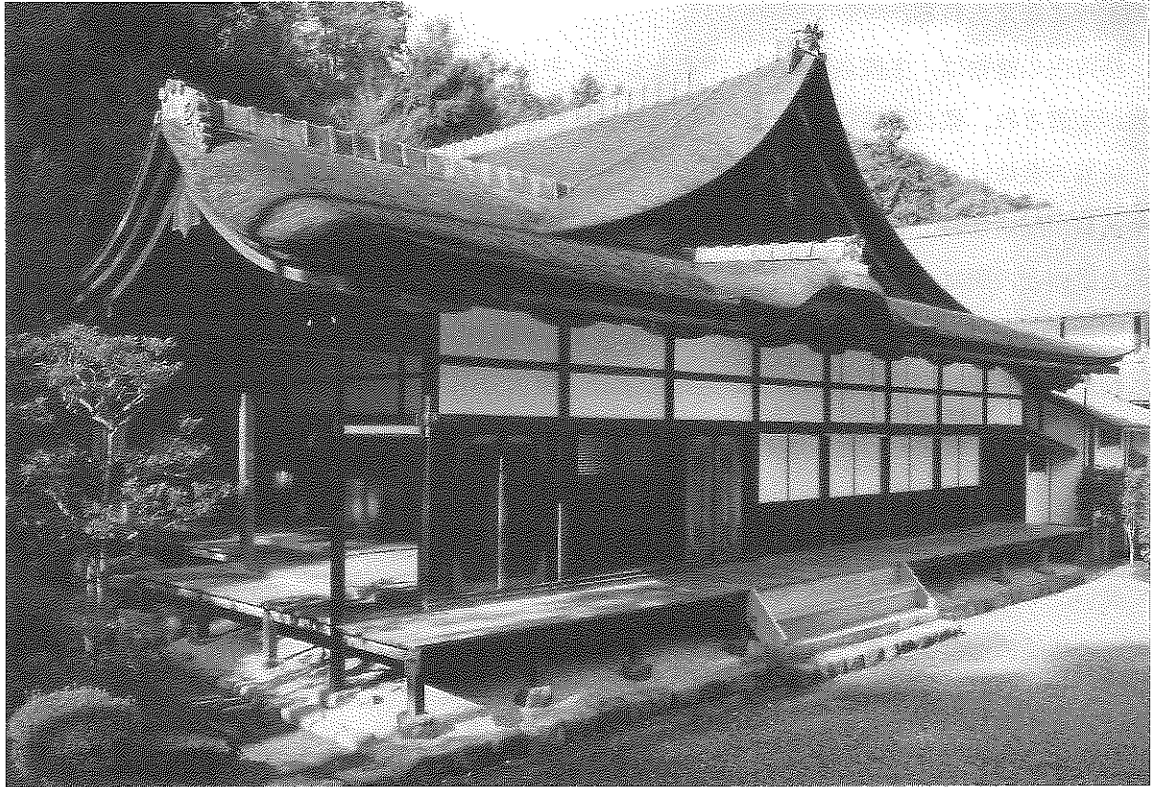
現地地形から想定できるこの坊院の敷地規模は、東西27m・南北50mの約120坪で、決して大きくはないが、これは白川金色院全体が丘陵斜面を雛段造成をして敷地を作り出しているからであり、今回検出の坊院は、この限られた敷地を効果的に利用して建物を配置し、庭園を造っている。白川金色院の他の諸坊も同様に、当地の地形的制約の中で空間利用がなされている可能性が極めて高い。

この坊院の造営年代については、断割で遺構基盤土が盛土であることを確認したが、出土遺物は細片で、造営時期を明確にすることはできなかった。

しかし、『勸進状』によれば長祿4年(1460)に、盗火に遭って諸堂が焼失しており、その後直ちに再興されている。かつ、発掘調査で長祿4年の焼土層が検出されていないことを積極的に評価すれば、今回発見した坊院は室町末期の金色院再興時に造営されたものと評価できる。H 6 - 2



第24図 中世坊院平面構成想定図



第25図 園城寺光浄院客殿（慶長6年[1601]創建）

調査区で室町末期の遺物が出土していることはこの傍証となるものと考えられる。

廃絶は出土遺物の状況から江戸時代中期と考えられる。延宝6年（1678）の『延宝年中勸進状』に記される「白川十六坊」の一つとして判断してよいだろう。

S B 2101の建築様式について 母屋である主殿に中門廊が付設する「主殿造」は、寝殿造から書院造への移行過程に置かれる建築様式として把握できるものである。この建築様式の特徴である中門廊という張り出しは、寝殿造建築の寝殿から南庭に延びる中門をもつ長い廊（中門廊）が本来の意味を失い、短い廊状の建築物として主殿に付属する。

現存する主殿造は、大津市の園城寺勸学院客殿（慶長5年[1600]）・光浄院客殿（慶長6年[1601]）だけであり、共に江戸時代初期の建物である。この建築様式を最も良く見ることができるのは絵巻の中においてであり、『法然上人絵伝』の法然上人の生家（漆間時国の館）、『一遍上人絵伝』の一遍上人の生家・信濃国の豪族大井太郎の館、『前九年合戦絵巻』の安部頼時の館が著名である。このような絵画資料から、鎌倉時代には主殿造建築様式が広く有力者の住宅様式として採用されていたことがうかがえ、江戸初期まで一定の位置を占めながら存続したことは、前述の園城寺例が示している。しかし、その遺構が発掘調査で確認された例はないようであり、今回の調査は中世「主殿造」遺構の初例といえる。

今回検出した中世坊院跡は、室町時代後半期に比定できるが、主殿造の構造や付属施設の配置状況は、前述の法然上人生家と極めて類似する構成を取っている。坊跡での付属屋が、どのように利用されたかは明確にし得ないが、絵巻に記された主殿造住宅との高い類似性は、不明な点が多い中世住宅の具体像を復元していく上で極めて高い資料価値を持つことはまちがいない。

C. 平成7年度（第3次調査）

平成7年度の発掘調査は、地元で「もんじゅ」と呼ばれ文殊堂跡地とされる地点（H7-2調査区）と、白川金色院中心域南側に展開する棚田の一角（H7-1調査区）の計2カ所で行った。後者の棚田は、昭和55年度の発掘調査で検出した園池の南に位置する。前者では発掘調査の結果、平安後期のいわゆる白川金色院創建期頃と想定される礎石建物が確認された。しかしながら検出された建物が調査区西側に続くことが判明し、その全容解明は平成7年度では明らかにできなかった。その詳細調査は次年度の平成8年度発掘調査で実施することとなった。このためこの調査成果については次項でまとめて報告する。

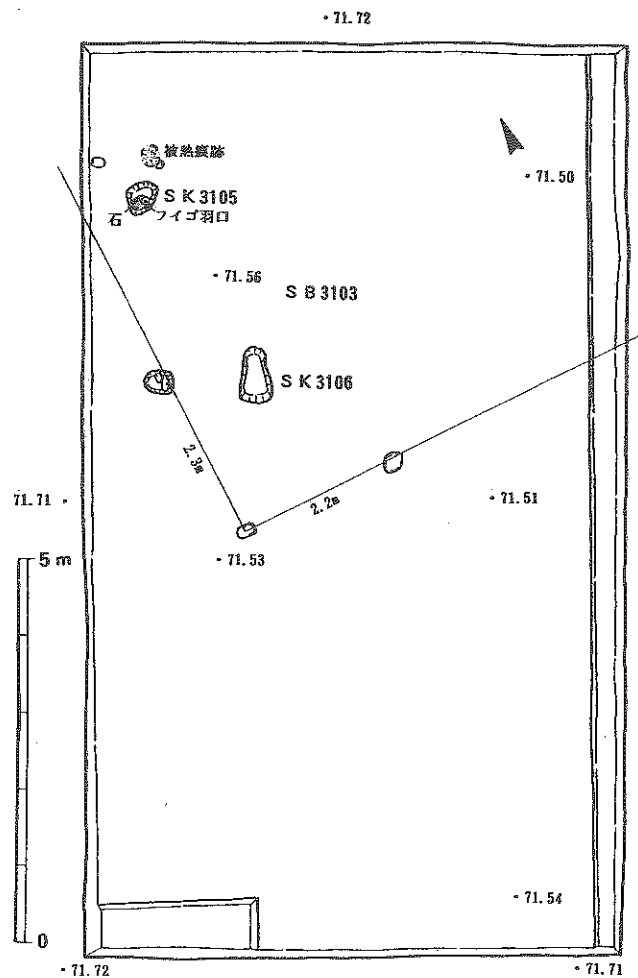
a. H7-1調査区3-1～3トレンチ（図版3・4、写真図版18）

創建期頃に溯る平安後期の礎石建物がH7-2調査区で検出されたため、調査はこの調査区を重点的に行った。このためH7-1調査区では遺構存在の有無を確認するに止まり、検出遺構の全容確認にまでは至っていない。トレンチは計3カ所を設定した。

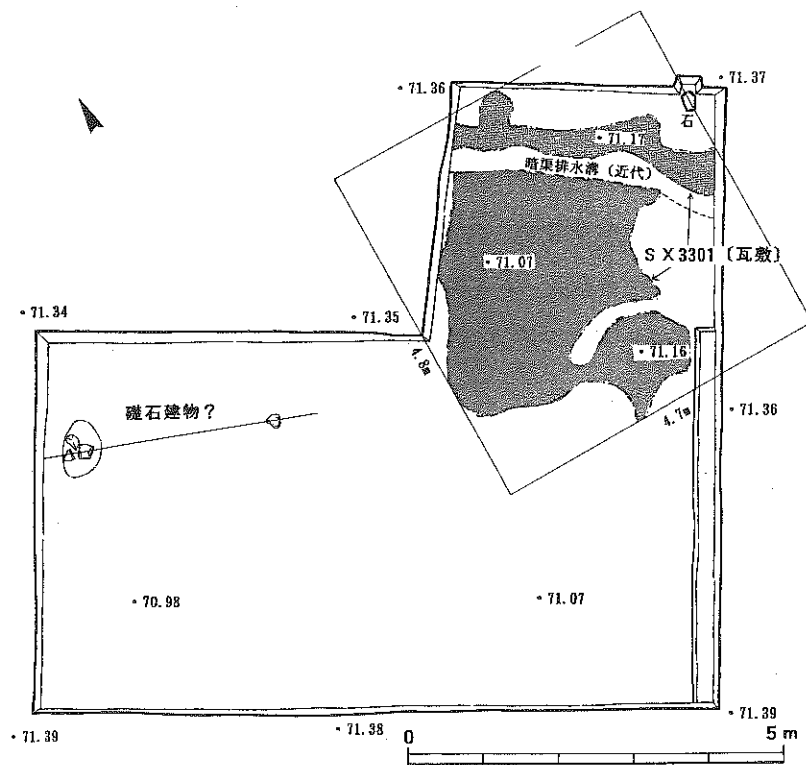
土層の状況 いずれのトレンチも基本的に同一である。現在休耕田であるがかつては水田利用だったようで、現地表面下約0.2mまでが耕作土で、その下に床土の黄褐色土層が部分的に薄く広がっていた。これらを除くと3-1・3トレンチ両トレンチから遺構と中近世の土器類が出土した。各トレンチで断割を行い遺構面の下層を確認したところ、3-1トレンチ北部以外は、すべて盛土造成によって遺構面が形成されたと判断された。こうした状況は昨年度発掘調査した南隣りの一段高い棚田上でもみられ、H7-1調査区一帯に展開する大小様々な平坦地は、いずれも造成に次ぐ造成によって形成されているものと理解された。その造成時期は出土遺物から、『勧進状』による室町中期の再興頃と考えられた。

S B 3103 後述の鍛冶関連遺構を囲む礎石建物であり、鍛冶工房の建物跡である。礎石は約25cmの小振りの石である。建物の規模は不明だが、現地形からトレンチ内で概ね建物半分が検出されたと考えられる。

S K 3105 直径約50cmの円形状の廃棄土壌である。底部には直径約20cmの



第26図 3-1トレンチ実測図



第27図 3-3トレンチ実測図

石がみられた。埋土中には鍛冶関連の遺物であるフイゴ羽口2本と鉄滓・炭・スサ入り粘土が焼けて固まったものなどがみられた。スサ入り粘土は、鍛冶炉の床に貼り付けられたものと思われる。この土壇横には直径約20cmの円形状の被熱痕跡があり、土壇出土の遺物内容から、鍛冶炉の底部が辛うじて残ったものと考えられる。

S K 3106 南北0.7m、東西0.5mの楕円形状の土壇である。

炭を多く含み、土器を若干含む。炭は粉炭状を呈する。

S X 3301 瓦を敷き詰めた遺構である。近代の素掘り溝によって一部切られている。瓦は平瓦・丸瓦・軒丸瓦・軒平瓦があり、平瓦が圧倒的に多い。すべて破片で完形品はない。軒瓦（図版36;18・19、図版38;44~47）は室町後期後半に比定されるものである。これらの瓦には時期差が認められず、一括性の高い瓦群として理解できる。また瓦には二次焼成を受けた痕跡はない。不必要となった瓦葺きの建物が解体されるに際して、屋根瓦として使用できるものとできないものとの選別され、後者のみ持ち込まれ2次利用されたものと思われる。瓦や礫等を建物の基礎（地業）部分に埋め込み地盤強化したいくつかの事例が知られ、この遺構もその部類に該当しよう。この遺構が建物の地業であるという前提にたち、方位を重視して瓦の広がる範囲をみていくと、一辺が4.7mないしは4.8mのほぼ正方形の中に概ねおさまってくる。小規模な建物が建っていたのであろうか。瓦の年代からその造営は江戸時代に位置づけられる。

小結 平成8年度報告で詳細は述べるが、今回の発掘調査成果のメインは平安後期のいわゆる創建期の礎石建物が検出されたことであろう。第1次調査では平安後期河内向山系の軒瓦が出土し、瓦の年代が『勸進状』の記す創建期と合致し、『勸進状』の記載内容の信憑性が高まった。今回は遺構であり、このことから確実に『勸進状』の記す創建時期に寺院が存在したことが明らかとなった。四條宮寛子創建問題にも貴重な提起を示すことができたといえる。またそのほかでは3-1トレンチの鍛冶関連の遺構がある。おそらくは寺院付属の工房跡であろう。遺構的にはかなりの削平を受け残りが良くないが、寺院内における空間利用の有様を考える上でも重要な成果である。遺構の年代は決定しがたいが、室町中期の再興時以降であることはまちがいない。

D. 平成8年度（第4次調査）

平成8年度の発掘調査は、平成7年度に検出した平安期礎石建物の全容確認と昭和55年度の発掘調査で検出された池跡の汀線を確認することを目的とした。

a. H8-1調査区・H7-2調査区4-1・3～6、3-4トレンチ（図版3・4・10～12、写真図版15～17・19～22）

平成7年度発掘調査で実施したH7-2調査区と今回調査区の計2カ年にわたる調査で礎石建物SB3401の全容が明らかとなった。

土層の状況 全体的な層位の堆積状況は、一部を除き比較的単純な平行堆積をなしている。例外は4-1トレンチ西半分で、江戸期以降の削平が著しくそれ以前の状況は不明である。その範囲は礎石建物SB3401及び室町中期以降に再興された文殊堂とは直接関係がなく、ここでは省略する。土層説明は4-1トレンチ東壁の土層の状況を中心に行っていく。

まず耕作土を除去すると固く締まった灰白色粘土層が表われた。4-1トレンチ北壁では確認できないが、3-4トレンチではこの上層に炭・瓦・土器等を多く含む黒灰色土層が広がり、東側程その堆積層は厚く約15cmもみられた。遺物の大半が室町後半以降であることから、この灰白色粘土層が室町中期再興時の造成土で、上層の黒灰色土層は再興建物の廃絶時のものと理解された。

再興遺構面は標高約67.7mを測る。この層位は約0.1～0.2mの厚さで比較的薄い。この層を除去すると赤褐色を基調とした赤褐色系の土層が約0.3～0.4mの厚さで重層的となっていた。下層部には、風化で脆くなった岩盤を拳大程の大きさに砕きそれらを敷き詰め充填していた。地盤強化が目的であろう。この地盤が強化された範囲が概ね再興建物の位置を示すと思われ、再興建物も後述するSB3401とほぼ同一地点に建っていたと考えられる。これらを除去すると、同一基調色だがより色の濃い赤褐色土層が表われ、この面を基盤面とするSB3401等の平安期の遺構が検出された。平安期遺構面は標高約67.4mを測り、北から南に向かって緩やかに傾斜する。この傾斜は雨水滞留防止が目的と思われる。現地表面下約0.4～0.5mであり比較的浅い。またこの建物の北東部と南西部で焼土層が遺構面上を覆っていた。焼土層は薄く、また大半の礎石が抜きとられ二次利用されていることから焼亡後に清掃がなされたものと思われる。焼亡時期は後述するSD4608出土の土器から15世紀代で、『勸進状』の示す時期と合致する。

下層の状況は断割を行い確認調査をしている。その結果、基盤面の造成は雛段造成によるもので北山丘傾斜面をカットし、その掘削土砂を谷側に押し出し、不足分の土砂を補充して建物造営が可能な幅広い平坦地を作り出したものと理解された。盛土層は全体的に締まりが悪いが、水捌けは良く、雨水が滞留する状況は認められなかった。

また4-1トレンチ北壁では遺構面が緩やかながら西に向っていく程高くなり、西端では現地表面下約0.2mで浅い。標高は68.0mで礎石建物SB3401検出地点との比高差は50cm余りある。こうした状況から礎石建物SB3401の平坦面は、西隣りの工場地より一段低いものと理解される。

SB3401 平安後期のいわゆる創建期に造営された礎石建物である。建物は創建された後、南側正面を増改築している。創建期をI期、改修後をII期とする。

I期 SB3401は、方一間の母屋の周囲に庇を巡らす一間四面堂形式で、建物正面にあたる南側に一間通の孫庇を付設する。建物の平面形式からみて仏堂であることはまちがいない。空間的には一間四面部が内陣、孫底部が外陣（もしくは礼堂）となろう。束石が各所で確認できることから、建物の内部は全面床張りと考えられる。柱間は母屋幅が3m（10尺）、庇幅が2.4m（8尺）、孫庇幅が2.4m（8尺）をとり、建物は桁行3間で7.8m（26尺）、梁間4間で10.2m（34尺）の規模となる。建物方位は磁北から東に2度振る。現存する建物で、ほぼ同規模・同時期なのが国宝鶴林寺太子堂（兵庫県加古川市）である。

礎石は建物背面部石列にのみ残り、そのほかはすべて抜き取られていた。残る礎石3個は直径30～40cmである。礎石抜き取り痕は計10カ所で検出でき、いずれも根石が良く残る。抜き取り痕は南正面側のものが大きく、また多くの根石が充填されていた。抜き取り痕の直径は約60～80cmで、根石の直径は約25cmである。根石の使い方は礎石の底に敷き詰める場合と、礎石と掘方との隙間を埋めるように敷き詰める場合とに分けられるようだ。束石は計4個検出された。

縁束石は建物の南半分すなわち南2間目までしか確認できなかった。縁束石は直径30～40cmである。北背面部の地覆石と縁束石の配置状況から、南半部のみ縁が付設され北半部2間分は縁を巡らせていないと考えられる。滋賀県例では天台宗系の仏堂である延暦寺根本中堂、同天輪堂、西明寺本堂、金剛輪寺などにみられ、書写山円教寺講堂（兵庫県姫路市）もこうした形態をもつ。発掘調査では、10世紀の大知波峠廃寺（静岡県湖西市）の堂舎が知られる。縁がない範囲には基本的に建物への入口すなわち板扉が付設されていないことを暗示する。

建物正面の南側基盤面は縁下で一段低くなる。現存で30cm弱の比高差である。漆喰状の痕跡はない。正面からみると低い亀腹基壇状を呈していたであろう。亀腹基壇の一般的な時代変遷と現存最古の一乗寺三重塔（兵庫県加西市）の事例からこの有様は古相を示している。

建物背面部の北側柱列には1列ないしは2列で地覆石が配されていた。背面部は地覆構造になっていたと考えられる。このように正面部と背面部で異なった下部構造をもつものに前述の西明寺本堂・大知波峠廃寺などがある。この地覆石から北0.9mの地点に直径20～25cmの石が2個あり、背面部ほぼ中央一間分に小付属施設が存在していたと想定された。仏堂背面部の付属施設は、史料によれば閼伽棚が多いという。ここでは『門葉記』に記す葛川明王院本堂（滋賀県大津市）の指図を参考とした。鎌倉初期以前の指図で、本堂背面部に小付属施設が取り付け、「閼伽棚」と記される。今回検出の小付属施設も閼伽棚の可能性を指摘しておきたい。現存では東大寺法華堂閼伽棚が最も古く鎌倉前期である。

瓦は建物範囲からは出土していない。しかしながら前述したようにSB3401は焼亡後に、整理された可能性が考えられる。建物北東のSD4608から出土した遺物が当該期に比定されるが、平安後期から室町前期頃までの瓦を含んでいる。また北山丘裾部には時期不明ながら大きな瓦溜りが存在する。屋根に瓦が葺かれていたかは現状では保留せざるを得ない。将来の課題である。

なお母屋付近で石製宝珠片とも思われる石材が1点出土している。栄山寺（奈良県五條市）や毛越寺（岩手県平泉町）に現存例が知られるが、特定できなかった。

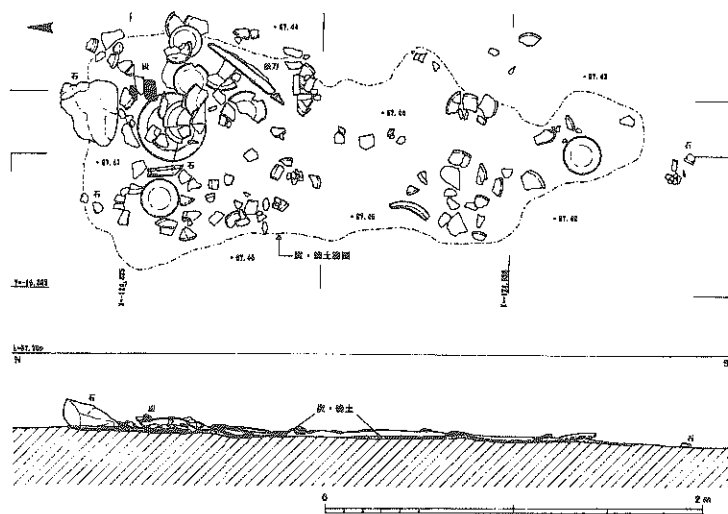
Ⅱ期 建物の平面構成は基本的にⅠ期と同じで、南正面部に変化がうかがえる。状況的には増改築であったと思われる。亀腹基壇状を呈していた南縁の基盤面を盛土造成によって建物の基盤面と同じ高さまで嵩上げし、全体的に平坦に仕上げている。そして南縁東石列から約1.6m南に直径約15cmの小振りの石で配された地覆石が巡り、その地覆石列には部分的に礎石が置かれたようで、建物東側柱列と地覆石列との接点部に直径60cmの礎石が確認された。現状では向拝（階隠）設置に伴う増改築と想定しておきたい。

また建物の南西部には縁東石から西約0.6mの地点にほぼ1.65m間隔で南北に並ぶ礎石が3個確認された。礎石の直径は20～30cmである。小付属施設が設置されたと考えられる。現状ではこれも閼伽棚の可能性を指摘しておきたい。

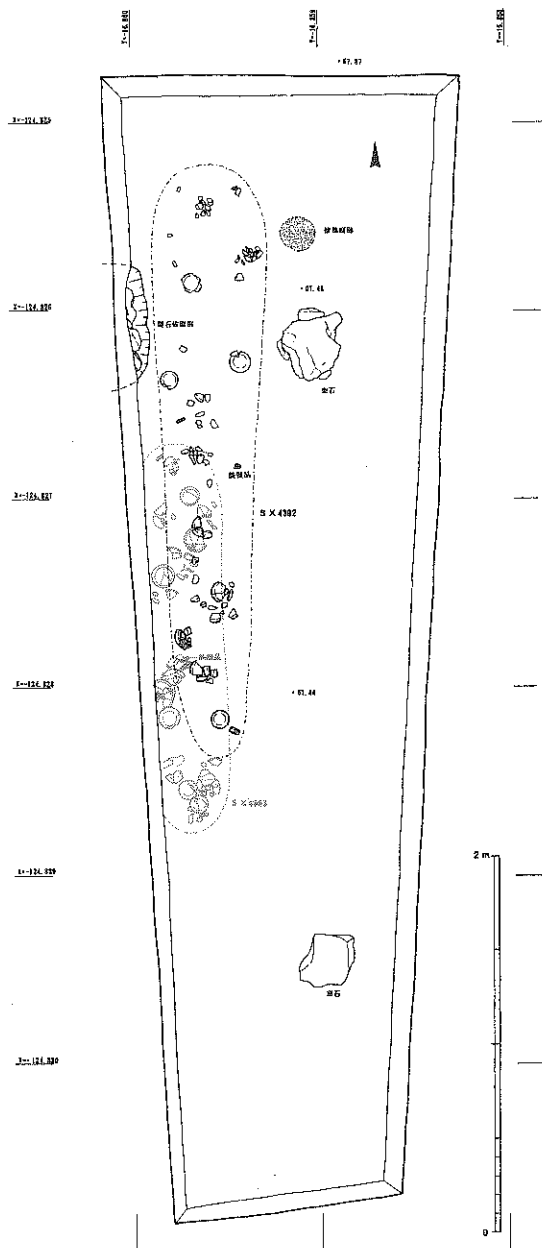
S B 3402 S B 3401の北東で検出された礎石建物である。一部の検出であり全容は不明である。直径約40cmの礎石が2個確認された。礎石間は心々間で約1.1mを測る。基盤土は版築で仕上げられ硬い。S B 3401の東側柱列と東縁東石列状に各礎石は位置し、S B 3401と関連した建物と考えられる。建物方位が違うため創建当初からの可能性は低いですが、S B 3401に付属した小規模な建物を想定しておきたい。

S X 4101 南北1.6m、東西0.6mの範囲で土器・鉄刀・炭・灰を含む焼土層である。約1cmの厚さしかなく、炭はほぼ形状をとどめる。北端部ではほぼ完形品の土師器と鉄刀1本が一定のまとまりをもつものの、全体としては土器の破片が散乱した状態を示す。北端部に直径20cm強の石が1個存在する。遺構面には被熱痕跡は認められなかった。検出状況は、基盤土層を薄く覆う褐色土層を除去すると土器が表われ、基盤土層の赤褐色土層を若干掘り下げることで、全体が検出できた。これと同様の出土状況を示す類例は平等院多宝塔跡、六勝寺B地区S X 105、高陽院などがある。いずれも地鎮関連遺構と考えられ、S X 4101も同一の性格と考えられる。出土遺物から12世紀初頭から前半ごろが考えられる。

S X 4302・4303 S X 4101の東側で検出された土器溜りである。南北に細長く約3mの広がりをもつ。これらは上下2層に概ね分けられ、上層をS X 4302、下層をS X 4303としてとり上げた。S X 4101のような焼土層が認められない。土器は南側に集中して出土する傾向が認められる。S X 4101よりはまとまっているが、土器片の散乱状況は同じである。完形品となるものが比較的多い。またS X 4302の北東隅近くに直径約25cmの円形状を呈する被熱痕跡を確認した。S X 4302とほぼ同一面出土した。S X 4302と何らかの関係が推察される。検



第28図 SX 4101実測図



第29図 SX4302・4303実測図

出状況はS X4101と同一の状況を示し、S X 4302が12世紀初頭から前半ごろ、S X4303が12世紀前半ごろと考えられる。検出層位・時期から、一連の地鎮関連遺構と想定される。

S X 3403 遺構の輪郭を明確に把握できていないが、小玉(鉛ガラス製)17点、複弁十六弁蓮華文様の漆塗金箔片・土師器片・鉄釘類・白雲母片・炭が比較的まとまって出土し、その後の整理で遺構と理解した。出土地点は建物の母屋部分にあたる。4-3トレンチ北端でも同一の小玉数点が出土しており関連遺物であろう。詳細な層位はおさえられていないが、前述の地鎮関連遺構と同じように出土している。土器は12世紀前半ごろである。

S D 4608 現地表面下約0.4mで検出された「く」字状にやや折れ曲がる南北方向の溝である。地山面を直接掘り込み、溝底は北から南に向かって緩やかに傾斜する。明らかに建物を避けて掘削されている。建物背後の山丘から流れ落ちる雨水が建物下に流れ込まないように掘削された雨落ち溝と思われる。溝の埋土は炭・灰を多く含む黒色土で覆われる。その中に瓦・土器・鉄製品が含まれる。土器の示す年代は15世紀代であり、『勸進状』に示される焼亡年代と一致する。

S K 4107 礎石建物S B3401の北西部で検出された土壌である。一部を検出したのみでその範囲は不明である。土壌内には破損した多量の瓦と鉄釘類が含まれる。土層断面から土壌は室町中期再興時以降である。出土遺物に二次焼成は全く認められず、また焼土を含まないことはS D 4608の状況と異なる。

S X 4104 4-1トレンチ南端で現地表面下約1mで検出した集石遺構である。黒褐色土層を遺構面とする。平安期遺構面の下層にあたるため、調査範囲は限定され遺構の範囲は明確ではない。ボーリング調査で、東の礎石建物S B3401の下層へは続かないと理解された。現状では概ね東西3m、南北約2mの範囲で2カ所に集中しているようにも見受けられる。重層的な石の広がりはない。また意図的に石を配置した形跡も読み取れない。石は直径約10~40cmと大小様々であるが、20cm前後のものが多く、チャート質と砂岩のものが大半を占める。石と石の間に挟まるよ

うに縄文晩期の石鏃、白磁碗・11世紀後半の土師器が出土した。チャート質の石材は白川地域ではみられないことから、人為的な所産と考えておきたい。時期・性格共に不明である。

S D 4105 南北方向に走る溝で、幅0.6m、深さ約20cmを測る。南側の残りが良く、溝内には直径約15cmの石が2段に重なって充填されていた。暗渠であろう。

S D 4106 南北方向に走る溝で、幅0.9m、深さ約30cmを測る。

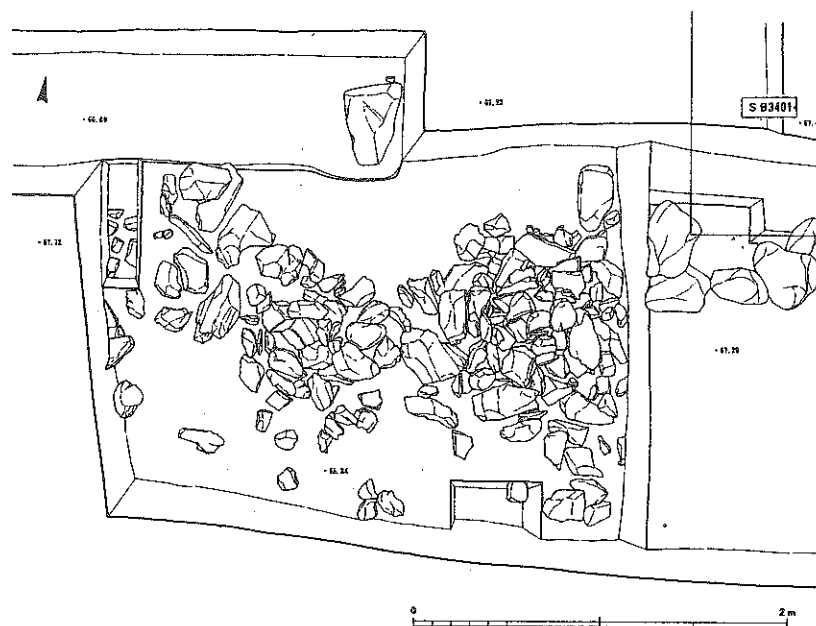
S X 4108 礎石根石を思わせる集石部分を3カ所で確認できた。ほぼ一直線上に並びS B 3401とは方位を違える。

S D 4105・S D 4106は、土層の状況で説明してきたように検出地点から江戸時代以降の遺構と考えられる。S X 4108については不明であるが、古く溯る可能性もある。

b. H 8 - 2 調査区 4 - 2 トレンチ (図版 3・4・9)

調査区は池の汀線の検出を主目的として設定した。昭和55年度の発掘調査地点はこの調査区南隣りである。樹木の関係上、面的な調査が不可能で、土層の堆積状況からの確認調査となった。

地表面を薄く覆う表土(褐色土)を除去すると、コンクリート舗装されその下にコンクリートブロックなどを敷き詰めた約1mもの厚さの埋め立て土があらわれた。これらは白川区集会所建設時に伴う工事用道路であったことを地元の方から伺った。この層を除去するとトレンチ南側で道路工事前の旧表土が表われた。トレンチ南端で断割を実施し、現地表面下2mまで掘削し暗黄褐色土、青灰色粘質土を検出した。青灰色粘質土から江戸期の信楽焼すり鉢2点出土し、江戸期上限の層位と確認された。また土層の状況から池の堆積層が考えられた。昭和55年度発掘調査では青灰色粘質土とその下に腐植土層を確認し、この2層を池埋土と判断している。池底の標高は約62.3mを測り、上層の検出高約62.7mを測る。今回検出した青灰色粘質土の検出高は最も低いところでも64.2mであり、その間には1.5mの比高差がある。南端は約1.5m掘削したがこれ以上の掘削は作業上危険と判断し調査を終了した。このため青灰色粘質土全体を検出するには至っていない。トレンチ北端では現地表面から3m近くまで掘り下げた。土層は北から南の池側に向かって落ち込む状況がみられた。暗黄褐色土下の黄褐色土が造成土で、盛土造成された状況がうかがえた。昭和55年度検出の池との関係は比高差があまりにも大きく判断しがたい。その下層はすべて地山層であった。

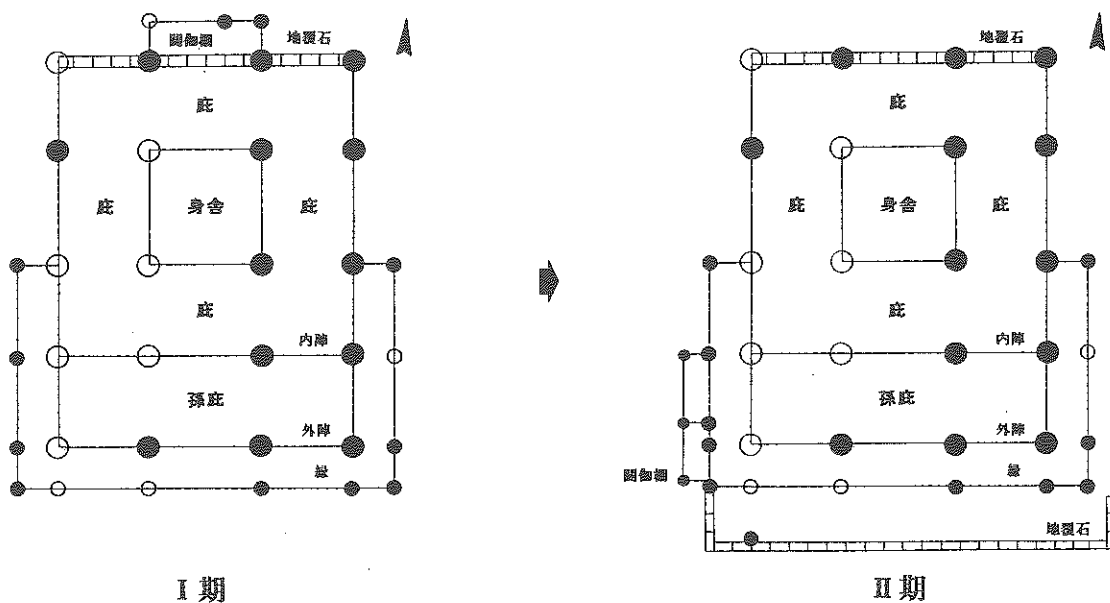


第30図 SX4104実測図

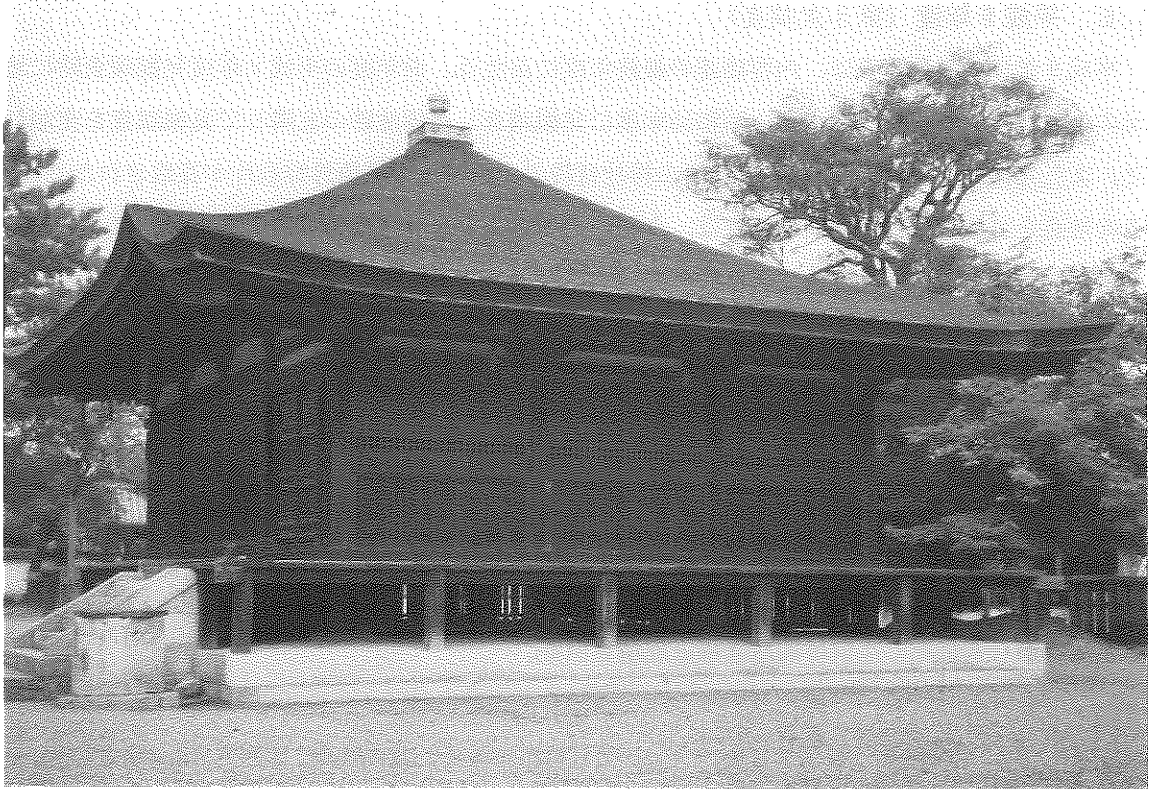
小結 平成7・8年度の計2カ年にわたる発掘調査で、礎石建物S B3401が一間四面孫庇付の仏堂であることが明らかとなった。この仏堂造営に関わる地鎮関連遺構（S X4101・S X4302・S X4303・S X3403）も検出され、遺構に含まれる土器の年代から12世紀前半ごろの白川金色院創建期の建物と理解された。創建期に遡る建物としては初の検出である。江戸期の絵図によれば当地には桁行3間・梁間4間の文殊堂が建っており、再興時に建てられたのは文殊堂であることはほぼまちがいない。『勸進状』によれば、創建期の文殊堂は七間四面の長堂形式であったと伝えるが、発掘調査で検出されたのは一間四面形式であった。最後にこれらも含めて整理しておきたい。

仏堂S B3401について 検出された仏堂跡は一間四面の南に孫庇を付設するものであった。縁は南半分のみ巡り、北半分は巡らせない。仏堂は平安後期に創建されてから室町中期に焼亡するまで最低一回増改築が行われている。平面的変遷図が第31図である。この改築が向拝増設に伴う可能性はすでに指摘したとおりである。ここでは屋根の形態をみていきたい。屋根の形態が、建物の復元に大きく影響を与えるからである。現存する一間四面堂でみると、宝形造が一般的な屋根形態である。鶴林寺太子堂は、その代表で宝形造で南に孫庇が葺き下ろす檜皮葺き屋根である。そのほかでは寄棟造の鶴林寺常行堂、入母屋造の大原三千院本堂（往生極楽院）などがあり、妻側を正面にすえた屋根形態である。このタイプは棟薺があり、少量の瓦が使用される。

まず先にⅡ期についてみていくと、宝形造とした場合、増築部の屋根は極めて低くなり違和感を感じる。むしろ三千院本堂のような入母屋造とみた方が無難であろう。絵図によれば再興建物は入母屋造状の形態となっており、その前段階をほぼ踏襲したとも受けとれる。Ⅰ期創建期については、現存例の時代性を重視すれば宝形造ともいえようが、今のところその解答は情報量的にも保留せざるをえない。平面構成からみるこの変化は、屋根の形態そのものを大きく改変する程の大改修であったと考えているが、いずれにしろそのどちらになるかで全く異なった建物の復元ができ、資料の増加をまって慎重に検討していきたい。



第31図 仏堂跡SB3401変遷図 (1:200)



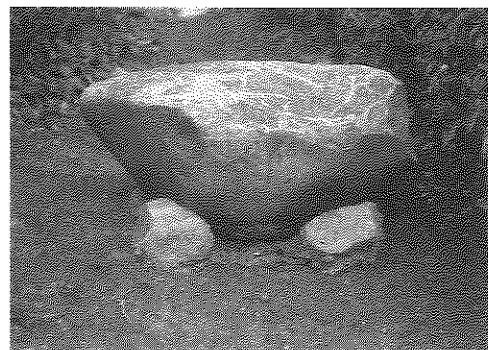
第32図 鶴林寺太子堂（一間四面孫庇付・宝形造・12世紀初頭創建）

文殊堂か否か 文殊堂は本尊を文殊菩薩像とし、五大山文殊と呼ばれる獅子の上に乗った文殊菩薩単体か、もしくは文殊菩薩を中心にその四方に四眷属を配置する文殊五尊像のいずれかが安置される。文政8年（1825）作成の『白山文殊堂福泉坊什物帳久世郡白川村』には「黄金仏五躰

是ハ文殊菩薩御厨子台之内ニ納有之候」とあり、これが平安時代に溯るとすれば後者であるが、現存しないため不明である。いずれにしても文殊菩薩が中心仏の場合、仏像が横並びする長堂形式は想定しがたい。むしろ求心形をとる一間四面堂形式であった方が妥当であると考えられ、今回検出の仏堂が文殊堂であったとしても矛盾しない。

この一間四面堂は、構造的にみて仏堂建築として最も基本的であり、小規模ながらも一定の仏教儀式が執行可能な構造である。平安中後期以降、末法思想による阿弥陀信仰隆盛の中でこの形式の阿弥陀堂が数多く建立され、またその多様性が諸記録よりうかがい知られる。したがって、平面構造だけでは、堂宇の性格は導きがたいといえる。

調査区西隣りでかつて大きな石が3個発見されたといい、その一つが第33図である。直径60~80cmの平坦面をもち仏堂の礎石として十分な大きさである。西側にも仏堂の存在が指摘でき、こうした他の堂塔の配置が明らかになって初めて、今回検出の仏堂の性格も一定整理ができるものと思われる。『勸進状』のいう「七間四面」堂については今後期したい。



第33図 工場建設時に出土した石材

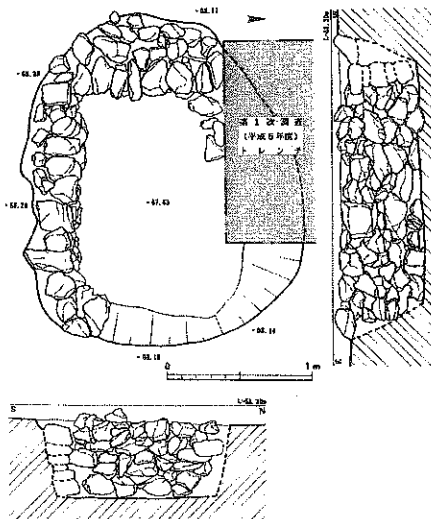
E. 平成9年度（第5次調査）

平成9年度の発掘調査は、内容確認の最終年度にあたる。前年度の平成8年度発掘調査時に地元の古老から伺った湧水地点と、昭和55年度に発掘調査した園池跡の北隣りで発掘調査を実施した。また発掘調査中の山間部踏査で、白山神社背後の山頂付近で経筒外容器片が採取されたため、その地点を追加調査した。湧水地点は、今回の発掘調査と上林清泉の『白山宮之図』により関伽井跡と理解された。関伽井跡は次年度も継続的に発掘調査を実施しており、関伽井跡については次年度にまとめて報告する。結果的に計5カ所の調査区を設定した。

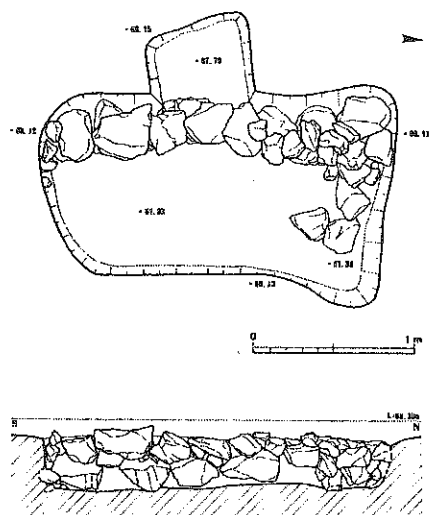
a. H9-1調査区5-1トレンチ（図版3・4・16、写真図版30・31）

調査区は、金色院最後の坊院である福泉坊跡地である。平成5年度の発掘調査地(H5-1調査区)はその北隣りである。福泉坊の近世期は、絵図・文書などで明らかな点が多いものの、中世以前の状況となると判然としない。当該地は位置的に白川金色院の中でも中心地とされるところである。

現地表面下約0.3mの浅さで地山の黄褐色粘質土があらわれ、遺構が確認された。検出遺構は出土遺物から近世期の福泉坊関連遺構と理解された。



第34図 SX5101実測図



第35図 SX5103実測図

検出した主要遺構は、SX5101・SK5102・SX5103・SK5104である。SX5101は東西2.3m、南北1.5mの東西に長い長方形の土壇で、深さ約50cmで南・西壁面は4段ないしは5段で石組が組まれる。北壁面は不明で東壁面はない。地下式倉庫が想定される。SX5103は南北2.5m、東西1.3mの南北に長い長方形の土壇である。深さ約30cmと浅い。北壁面と西壁面は2段に石組が組まれる。SX5101と同様の性格か。このトレンチでは中世期以前の実態を把握することができなかった。

b. H9-2調査区5-2トレンチ（図版3・4・16）

絵図から池坊跡と想定される地点である。現地表面下約0.6mで礎石らしき石を確認したが、湧水が著しく、実質的な調査が全くできなかった。

c. H9-3調査区5-3・6トレンチ（図版3・4）

現地表面下約2mで南から北に向かって傾斜する地山面を確認し、旧地形を確認した。

d. H9-5調査区5-5トレンチ（図版3・13～15、写真図版23～27）

発掘調査中の山間部踏査により経筒外容器が採取され、調査区を急遽設定したところで、12世紀後半を主とする経塚関連遺構が検出された。

検出された経塚関連遺構は、白山神社背後の山頂付

近で、山頂から白山神社側へわずかに下ったあたりに展開する。標高は概ね103mから105mの間に位置する。山頂部の最高所は約107mを測る。表土層は薄く、約10cm掘り下げると地山である岩盤面があらわれた。経塚関連遺構は、この岩盤を割り貫いて作られていた。経塚埋納時の岩盤強度は不明であるが、発掘調査時の岩盤は風化が著しく脆弱であった。また同時に比較的掘削しやすい印象を受けた。この脆弱さのためか、土壌を穿った際の加工痕は見出だせなかった。

S X 5501 一辺約0.4m、深さ18cmの方形の小土壙である。この土壙内から数多くの遺物が出土した。遺物の出土状況は図版14に示したとおりであり、大半が土壙内のほぼ中程より上部で出土した。遺物の状況から盗掘などの再度掘削された状況は認めがたく、この土壙内に埋納された主体品はすでに朽ちて消滅したものと考えられる。

以下、検出された順、すなわち発掘経緯順に説明していくこととする。

まず岩盤上に直径15cm・厚さ約7cmの偏平な石2個が並置された状態で検出された。山頂付近では見られない石材で、人為的に持ち込まれたものと理解された。

これらを取り外すと土壙状の輪郭がくっきりとあらわれ、少し土を取り除いてみると、土壙東側で、南北に並置された青白磁の合子（北）と小壺（南）がほぼ同一レベルで土壙内側にやや傾いて出土した。合子の蓋は土圧で割れていたものの、両方ほぼ完存状態であった。小壺は横向きに倒れ蓋が外れていたが、元来は身と蓋が合わさり置かれていたと思われる。合子は身と蓋が合わさって出土した。土壙西側では鉄釘類が数本出土し、木箱の存在が想定された。鉄釘類の出土地点から、陶磁器及び後述する和鏡等の一括遺物群とは別物と考えられる。

陶磁器を取り上げると、そのほぼ直下で土壙内に落ち込むように和鏡が2枚重ねで、鏡背を上に向けた状態で出土した。和鏡上面南隅に鉄製毛抜き1本、現状を止めていない青銅製品と漆製塗膜片、木製数珠玉31顆、皇宋通寶1枚がまとまって出土した。出土状況からこれらは一括して袋状ないし木箱状のものに納められていたと推測される。また、少し離れて青銅製品（瓔珞？）が2点出土した。これも前述遺物と大きく一括りにできるものであろうが、同じようにその中に納められていたかは判断できない。この一括品は、土壙上部東側に置かれたことはまちがいない。この土壙内の主体品ではなく副納品に位置づけられよう。

土壙内からはその後、土壙底部から小玉（鉛ガラス製）1点が出土するだけで、その他は鉄釘類しか出土しなかった。鉄釘類は計19本出土した。土壙の深さは岩盤面から18cmと極めて浅い。土壙の主体品は、多くの鉄釘を打ちつけた小型の木箱に小玉（鉛ガラス製）を添えて納められていたと考えられる。

S X 5502 S X 5501と同様、岩盤を露出させると蓋石が2個並置して検出された。蓋石はいずれも土壙内に落ち込むようにして出土した。直径0.3~0.4m、深さ15cmである。

埋土を少し取り除くと北壁面に合子の身と蓋が分かれた状態で、蓋石同様に土壙内に落ち込むかたちで出土した。埋納時は身と蓋が合わさり、蓋石の横あたりに置かれていたと想定される。中のものが朽ちて土砂が流れ込んだ際に蓋石とともに土壙内に落ち込んだのであろう。土壙内からは底部近くで小玉（鉛ガラス製）9点がまとまって出土した。鉄釘類は認められない。上部で

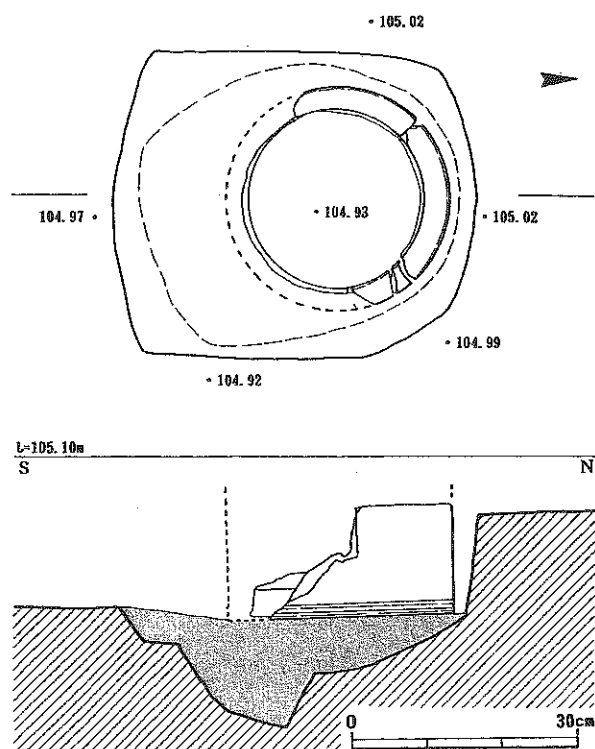
検出された蓋石及び陶磁器の出土状態からS X 5501と同じく木箱に主体品が小玉（鉛ガラス製）9点を添えて納められたものと考えられる。S X 5501と同じ性格の土壌であろうか。

S K 5503 一辺約0.8~0.9mの方形の焼土壌である。深さは約20cmである。壁面は約0.3mの厚さで赤変している。底部は赤変した箇所もあるが、壁面ほど顕著ではない。遺物は遺構輪郭検出時に瓦器皿が埋土内より1点出土した。その他の遺物は認められなかった。埋土は5層で重層的になし、量の多寡はあるが、いずれも炭・灰を多量に含む。

このような経塚に共伴する遺構の類例がほとんど報告されていない現状では、その性格を明らかにし得ない。火葬の跡か護摩焚きの跡と考えられたが、土層の状況でみる限り、今のところ経塚埋納時における護摩焚きの跡と考えておきたい。

S K 5504 直径約0.3mの小土壌である。S K 5503の北東山頂側約1mの地点で検出された。土壌は極めて浅く約10cmしかない。胎土の粗いいわゆる粗製土器の底部が破片で出土した。時期特定はしがたいが、位置関係よりS K 5503と関係する遺構と思われる。

S X 5505 S K 5503のほぼ東山頂側約1mの地点で検出された遺構である。直径約0.5mの土壌内で瓦質経筒外容器の底部が検出された。土壌の底部を平坦に整地しその上にその外容器が置かれていた。外容器を想定復元すれば外容器の上部は明らかに岩盤上に達し、以上のことからこの経塚はマウンドを盛って構築されたものと判断される。外容器は14世紀以降のもので、他の遺構と唯一時期が異なり新しい。それ以前に構築された遺構群を意識的に避けて構築された状況がうかがえる。S X 5505埋納時にはまだ地表面で確認できる何らかの表示のようなものがあつたと考えられる。



第36図 SX 5505実測図

S K 5506 S K 5503の北約2mの地点で検出された土壌である。檜の切り株下に位置し、遺構の詳細は不明であるが、銭貨が10枚出土した。熙寧元寶1枚、咸平元寶1枚、政和通寶2枚、紹聖元寶2枚、嘉祐通寶1枚、皇宋通寶1枚、元祐通寶1枚、不明1枚である。S K 5507と同一の性格が考えられる。

S K 5507 S K 5503の南約3mの地点で検出された土壌である。遺構の輪郭は明確にできなかったが、概ね直径約0.6mの大きさが想定される。底部に密着するような状態で銭貨が7枚出土した。大観通寶1枚、元豊通寶2枚、至和元寶1枚、聖宋元寶1枚、天禧通寶1枚、皇宋通寶1枚である。皇宋通寶のみS K 5506・S X 5501と共有する。

そのほか、表採品として渥美産経筒外容器片1点・青白磁小壺片2点・平瓦片1点があり、いずれも平安後期に比定される。いずれも今回検出した遺構群よりも低い地点から出土している。

小結 平成9年度の発掘調査では予想以上の成果をあげた。経塚関連遺構と関伽井跡である。関伽井跡は次節で報告する。経塚関連遺構は平安後期と室町前期の2時期認められたが、注目すべきはその前者で、平安後期の白川金色院を伝える貴重な成果となった。簡単に整理しておきたい。

平安後期の経塚関連遺構について まず立地であるが、山頂部近くで寺全体を見渡すことのできる最も見晴らしの良いところを選地している。この選地は九条兼実が埋納したとされる稻荷山経塚のそれと全く同様である。稻荷山の北西山麓には法性寺という藤原氏の寺院があり、その方角を意識した選地と考えられる。白川金色院も、白山神社との関連よりも寺院全体を意識したものと考えておきたい。経塚の埋納は遺物より12世紀後半ごろで、創建期より若干時期が新しい。

これらの遺構は、表採された渥美産経筒外容器片から経塚関連遺構であることはまちがいない。検出遺構の中でその性格をまず把握すべきものがS X 5501・S X 5502である。この二つの土壌内の主体品はすでに腐朽し、鉄釘類・小玉（鉛ガラス製）しか確認できなかったが、この土壌の性格を考える上で重要である。小型の木箱に納められたものは何か。まず想起されるのは経典であろう。しかし、これまでの経塚出土の経巻ではその大きさからまず厳しい。折り畳みの小さい経典であれば可能ではあるが空間的にはやや厳しい。ここでは、福岡県筑紫野市の武蔵寺第11号経塚の発掘調査事例や、『中右記』天仁元年(1108)条裏書に示す堀川天皇の遺髪(元服時の切り髪)を高野山奥ノ院に法華経とともに埋めたその記載内容などから「髪」の埋納を一つの解釈として考えておきたい。小型の木箱にも関わらず鉄釘が24本も使われていた意味は明らかにしがたいが、興味深い。

経塚本体については、検出遺構との直接的な関連性はないが地下埋納した土壌等といった痕跡がみられないことから、経塚は地表面に盛土をして塚をつくり、その塚内に渥美産経筒外容器・経筒に納められた経典が埋納されたと考えられる。表採された青白磁の小壺はその副納品か。そしてS X 5501・S X 5502はその経塚に添えて埋納された遺構と考えておきたい。なおこの土壌内から出土した数々の副納品からこの経塚造営を企画した願主が身分の高い人であったと推察される。

そのほかでは経塚埋納時における儀式の跡と想定される遺構が明らかとなった。S K 5503を中心とするS K 5504・S K 5506・S K 5507がそれにあたる。埋納時にどのような儀式が行われたかは不明であり、類例の増加をまって今後整理検討していきたい。

最後に遺構の位置関係で注目したいことを述べておく。儀式の中心とされる遺構は前述してきたようにS K 5503である。このS K 5503を中心にみていくと、S K 5506とS K 5507はS K 5503の中心地点からほぼ同距離で、南北方向に並ぶ。またその軸線を基軸にS K 5503の中心から西に直角に振ると約5 m離れた地点にS X 5501があり、北西方向へ約45度振るとS X 5502が約2.6 m離れた地点にある。また北東方向へ約45度振るとS K 5504がある。単なる偶然ではなく遺構の計画的配置が読み取れ、遺構はS K 5503を中心に構成、配置されているものとみておきたい。

2. 第Ⅱ期5カ年発掘調査事業（平成10年度～平成14年度）

平成10年度から平成14年度までの都合5カ年にわたって、白川金色院跡の範囲確認を主目的として発掘調査を計画した。記述内容はそれを主眼に整理していくが、H10-5調査区で検出された礎石建物と昨年度からの継続調査となった関伽井跡（H10-1調査区・H9-4調査区）のこの二つの調査成果については、検出遺構の重要性から遺構そのものの説明をしていくこととする。後者は平成9年度の調査成果とあわせて報告する。

F. 平成10年度（第6次調査）

平成10年度の発掘調査目的は、寺南方域の遺構確認と昨年度発掘調査した関伽井跡（H9-4調査区）周辺の遺構確認である。また発掘調査途中で緊急に個人住宅建設に伴う発掘調査を1件実施した。結果的に調査区は計5カ所設定した。

a. H10-1調査区6-1トレンチ・H9-4調査区5-4トレンチ（図版3・17・21・22、写真図版28・29・34・35）

前年度の平成9年度発掘調査から継続的に実施した関伽井跡の調査である。

発見経過 平成8年度第4次調査時に、地元の古老の方から、かつて湧水だったところがあると同い案内していただいたのが当該地である。現地は樹木の繁茂が著しくまた腐植堆積物が厚く覆っていた。案内されるままにその湧水地点とされる一帯を精査していくと、山裾部に湿地状となった円形状の窪みを発見した。そして、平成9年度の発掘調査と上林清泉の『白山宮之図』によってこの湧水地が関伽井の跡であると理解された。

立地 関伽井は白山神社が鎮座する丘陵（頂部標高約107m）の北斜面裾部に位置する。平成9年度調査の経塚関連遺構はこの丘陵頂部にあたる。『白山宮之図』に「下向道」と標記された白山神社からの降り道と、参道を真っすぐ東に向かい寺川沿いを伝う山道（現東海自然歩道）との合流地点に位置する。なお『白山宮之図』には下向道沿いに恵比須と天神の両社が建つ。跡地は確認でき小さい平坦面と地覆石のみが残る。関伽井は、東西約50m・南北約35mの東西に長い比較的広い平坦地に存在する。標高約62.5mを測る。寺川は、川底標高約60m前後で関伽井北側を西から東へ緩やかに流れている。この平坦面との標高差は3m前後である。等高線と検出遺構の位置関係から山裾部を大規模に削り取り造成された状況がうかがえ、おそらく雛段造成によるものとみてまちがいない。また関伽井東一段上に小規模な平坦面が認められた。南北7m、東西4mの南北に長く、標高は64.8～65.1mで東にやや傾斜する。関伽井の検出面から約2m高い位置にあたる。この平坦面も雛段造成であろう。なおこうした人為的な造成は、この地点より西側の山間部では確認されていない。

発掘調査は計2カ年で、関伽井跡を中心にそれに直接的に関わる遺構の検出を主眼に調査範囲を広げたため、結果的には平坦面西半部の調査となった。このため東半部は未調査のままである。

S E 5401 関伽井である。南北2.3m・東西2mでほぼ正方形の掘方をもつ。東半部は石を組んで上下2段の南北に細長いテラス状の平坦部を作り、上段南端に平坦面を西へ垂直にむけた山形状の立石が1個配される。関伽井への通路が西側にありそれを意識しての所作であろう。井戸

本体の湧水地は西半部にある。直径約1mの円形状を呈する。湧水が著しく実質的な調査はできていない。井戸枠などの木質材は認められず、現状でみる限り伏流水が湧水を形成しているものと理解した。今は地下水位が下がり、水量は雨天時を除けば極めて少ない。井戸の南山裾部には長軸1m、短軸0.6~0.8mの長軸を縦方向にした滝石組をあしらった遺構がある。一部崩落し前に倒れているが、本来はこれらも同様立石状に置かれていたと思われる。合計9個の石で滝石組に組まれていたのであろう。園城寺(滋賀県大津市)の閼伽井と酷似する。閼伽井の埋土から多量の江戸後期の瓦(図版39)と土器(第69図)が出土している。絵図から瓦葺の閼伽井屋の存在が知られる。現地形や等高線、遺構の状況から平面的には南北3.8m、東西約3.3m程の建物が推測される。

S X 5403 S E 5401とS G 6102とを繋ぐ礫敷遺構である。幅約0.7mで細長く延び、水路跡と判断される。礫は東西で使用石材の大きさが異なり、東は直径約10cmの小礫を敷き詰め、西は直径約50~70cmの大振りの石を配する。重層的ではなく、また下部構造は認められない。S E 5401とこの遺構の接点部には直径50~70cmの大きな石が1個置かれており、この石がS E 5401の水を一定量まで塞き止める機能を果たしている。この石によって一定の水量が確保され、それを越える水量に達すると閼伽水はこの石をオーバーフローし、礫敷遺構を伝ってS G 6102へと流れる。

S G 6102 S X 5403を伝った閼伽水が注ぎ込まれる小池である。池底に非常に細かな礫をあしらう。池底面は上下2段に分かれる。下段は水路状の流れを形成し、幅に変化を持たせながら「く」の字状に折れ曲がる。上段はやや平坦な礫敷面を形成する。池の北側と西側は、2段ないしは3段に石を組み壁面を構成する。西壁面では池との間に一段段差を設けている。これら壁面の北西角には下段流路と接続する澁み状の窪地がある。その窪地部分から完形に近い土師器数点が出土している。この池に流れた閼伽水は、一定の水量を越えるとオーバーフローしてS D 6104へと流れ込むようになっている。埋土から土器は出土するものの瓦は全く出土しない。石組の存在と池底面の小礫が比較的現状をとどめ、浚渫土をさらったような痕跡がはっきりみられないことから、この池にも覆屋が存在したと想定しておきたい。壁面を構成する石組上面のレベル値で考えれば閼伽井の覆屋とほぼ同規模のものが想定される。

S D 6104 幅1mの素掘り溝で排水路である。S G 6102からオーバーフローした水がこの溝を伝い北側を流れる寺川へと落ちる。溝の下流部では後に修繕した状況がうかがえ、水路幅を0.3m程に狭くして、石組溝に再構築している。

S F 5405 閼伽井へと通じる石敷遺構で通路である。幅約0.7mで、閼伽井に近い程残りが良い。直径30~40cmの石を3列ないしは4列でほぼ隙間なく敷く。その両側には縁石が配される。縁石の配置状況から、通路の位置は概ね復元できる。またこの遺構の先端部には直径約50cmの飛石が1個置かれている。

S K 5406 直径0.4m・深さ10cmの小土壙である。

S X 6108 ほぼ南北方向に並ぶ石列である。直径10~20cmの小振りの石である。土塀などの地覆石であろうか。

S B 5407 閼伽井東上段部平坦面で検出された建物である。地覆石から建物規模は概ね推察で

きる。それによれば建物は前後で規模が異なる。前側は幅2.0m、奥行1.1mで、後側は幅1.4m、奥行約0.6mとなる。また建物正面（北西）から0.6m北西地点にも地覆石が長さ約1.1mにわたって置かれていた。小社が想定される。建物の基礎には礫と瓦（図版22）が充填されていた。

b. H10-2 調査区 6-2・3 トレンチ（図版17~20、写真図版35）

トレンチは計2カ所設定した。福泉坊跡北隣りの平坦地である。

6-2 トレンチでは耕作土を除去すると、その直下で地山があらわれ遺構が確認された。近世期の素掘り溝・焼土層・礫集積などが確認されたが、中世期以前に遡る遺構は確認できなかった。

6-3 トレンチでは耕作土とその下層の茶褐色土を除去すると、炭と15~16世紀代の遺物を含む暗茶褐色の造成土が表われた。15~16世紀代の整地であるが、この面上では明確な遺構は確認できなかった。この層を取り除くと上層の暗灰茶褐色土と小礫が入り混じった黄褐色粘質土層が表われた。この面で柱穴が確認され遺構面と理解した。またトレンチ西端に断割を入れたところ、同一層でありながら全く純粋な黄褐色粘質土が表われ、この面上からも柱穴が検出された。出土遺物から時期差が認めがたい柱穴が上下2層に存在することが確認された。下層は12世紀後半、上層は12世紀後半から13世紀前半代の遺物が出土する。下層面は上層面で遺構のない地点を可能な範囲で調査した。上層面では数多くの土壇や柱穴が検出された。上層面の柱穴の大半は、底部に束石を置いていた。柱穴の大きさから仏堂よりも住宅風の建築が想定される。僧坊であろうか。下層は柱穴のみ数カ所で確認した。掘立柱建物の柱穴である。柱穴は上層面で確認された状況と全く異なる。柱を据えた後、掘削した土で丁寧に埋め戻されていた。このため掘方埋土と地山との区別が確認しがたい状況であった。また柱穴には炭と共に残りの良い土器片が半ば詰まったような状態で出土した。この状況は柱穴抜き取り後に廃棄した有様が想定され、下層建物が意識的に壊されたとも理解できる。その後ほぼ同一の土層で埋め戻され、ほどなく上層に別建物が建てられていることから、下層の掘立柱建物は、堂舎築造に伴う作業場と現段階では想定しておきたい。

c. H10-3 調査区 6-6 トレンチ（図版17~20、写真図版32）

この調査区では、平安後期から鎌倉時代にかけての重複する礎石建物2棟が検出された。

土層の状況 基本的に比較的単純な平行堆積状況を示す。耕作土と床土を除去すると、その下層に時期は不明であるが、遺物を若干含む黄褐色粘質土の造成土がみられた。その層を除去すると遺物を含む茶灰色粘質土が表われた。この層位も造成土で、この面上でまず遺構が確認された。トレンチ南側で残した礎石がそれにあたる。直径約30~40cmのチャート質である。詳述する下層遺構面まで掘削した後に理解できた遺構面であり、この面での遺構確認はできていない。厚さ約30~50cmのこの造成土を除去すると遺構面が表われた。現地表面下約0.6mである。標高は76.8~77.2mを測り、全体的に西から東に緩やかに傾斜している。遺構面は南側が地山で、北側が盛土造成である。南から北に向かって小さく張り出す丘陵の突端部を雛段造成によって作り出していると理解された。この造成以後はほぼその地形を踏襲しての土地利用がなされていくようだ。

S B 6601 礎石建物で、建物の南と西の側柱礎石を確認した。南西部以外は基本的に残りが悪い。建物の規模は東西が2間以上、南北も2間以上である。南北の柱間は約1.7mでその間に束石が

配される。東西の柱間は、現状では統一性に欠け西から順に2.1m, 2.2m, 1.5mを測る。礎石はチャート質か砂岩質で、直径約35cmと決して大きくない。西側柱列の礎石には必ず直径約20cmの小振りの石が接するように置かれていた。建物の周囲には直径約10cmの小石による地覆石が巡っていた。詳細にみると建物とは若干の振れがある。この振れの要因は判然としないが、修理等に伴う時期差が反映しているのかもしれない。また地覆石と柱列との距離は0.8~1.0mと、想定される建物規模から判断して離れすぎの感がしないでもない。この地覆石列とほぼ平行して約1m西側にも石列がみられた。長さ約1mで、長辺50cm・短辺20~30cmの石が並び、先の地覆石よりも大きい。土層の状況から建物の創建当初にはなく、後に付設されたものと考えられる。階段部分に付設された地覆石であろうか。

S B 6602 ほぼ磁北方向に建物方位をとる礎石建物である。その北西端部を検出した。遺存状況が悪く建物全体の詳細な状況は不明である。S B 6601とは同一面で重複しており、層位的には先後関係は明らかにできないが、あえて遺存状態の差から推察すれば、S B 6602がまず建てられその後にS B 6601が建て替えられたといえる。またトレンチ北半部ではほぼ全面、その他の地点でも部分的に焼土層がみられた。焼土層は比較的広範囲にわたっている。トレンチ北側では焼土層が上下2層で確認されている。そのことを踏まえればS B 6602焼亡後にS B 6601が新たに作られ、その後再び焼失し廃絶したとも考えられる。焼土層には土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・石製品等の日常生活品が主体を占める。そのほか、軒丸瓦が出土している。軒丸瓦は河内向山系と重圏文状のもので12世紀前半ごろ、他の遺物は12世紀後半から13世紀前半ごろに位置づけられる。遺物の出土状況は、廃絶の契機となった最終焼失時を示しているものと思われる。土器には二次焼成の痕跡をのこすものがあるが、瓦にはない。

落ち込み S B 6602北西角から北西方向に向かって緩やかな落ち込みが確認された。部分的にその落ち際には地覆石と同程度の大きさの石が乱雑に並んでいた。埋土は砂質土で焼土層は認められなかった。建物との関係は明らかにできないが、土層の状況から建物存続時にはこの落ち込みがあり、建物の焼失以前に消滅したと考えられる。建物に付随した小規模な池の岸辺であろうか。

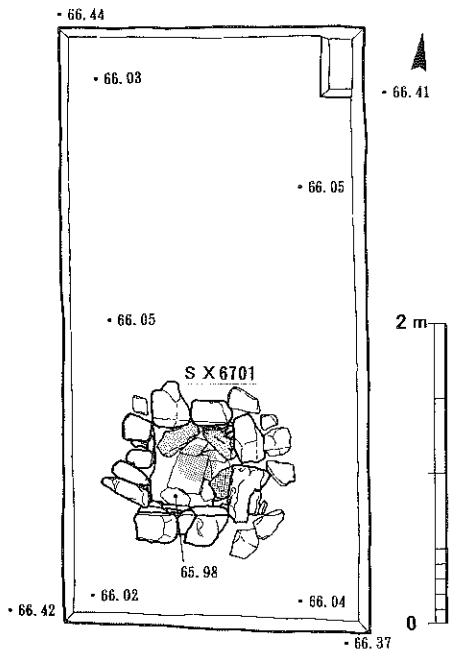
d. H10-4 調査区6-4-5 トレンチ (図版17)

湧水が著しく調査が難航した。遺構は確認できなかったが、瓦・土器片が少量出土し、付近に遺構の存在が予測された。

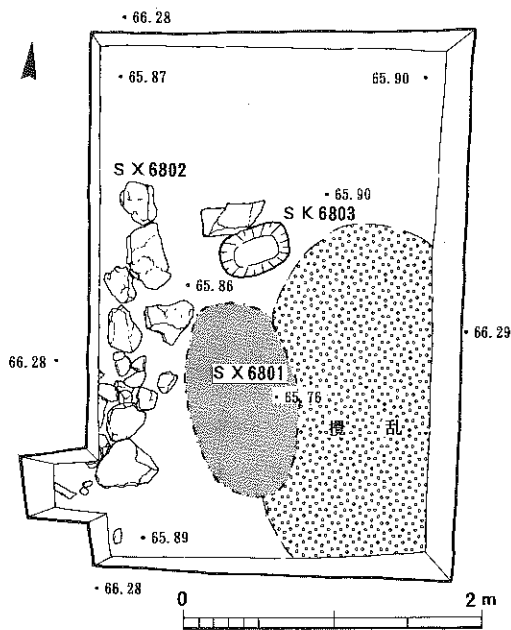
e. H10-5 調査区6-7-8 トレンチ (図版17・18、写真図版33)

調査区は福泉坊に次いで存続していた蔵坊が古絵図から想定される所である。個人住宅に伴う調査で、緊急的に対応したものである。小規模なトレンチを計2カ所設定した。

6-7 トレンチでは現地表面下約0.3~0.4mの浅さで遺構面が確認された。主な検出遺構は、S X 6701である。ほぼ正方形に組まれた小型の石積み遺構である。南北幅60cm・東西幅50cm・深さは残存部で約45cmを測る。転落石が中に多く落ち込み、本来は現状より数段多く石が積まれていたと考えられる。底面には石が貼られ、底面ほぼ中央に、一辺約25cmの方形状の上面が平坦な石



第37図 6-7トレンチ実測図



第38図 6-8トレンチ実測図

を置き、それを取り囲むようにコの字形に石を1段高く積み上げ巡らせていた。囲んだ部位の東西幅は約30cmを測る。こうした構造は、底部が小さく胴部が大きく張る茶壺のようなものを中に収めるためのものであったと考えておきたい。埋土内の遺物から、江戸時代と理解された。

6-8トレンチでも同様に現地表面下0.3~0.4mの浅さで遺構面が確認された。トレンチのほぼ4分の1(南東部)は攪乱で、詳細は不明である。主な検出遺構は、S X 6801・S X 6802・S K 6803である。S X 6801は南北1.3m、東西0.8mの楕円形状に広がる土器溜りである。土壙状とはならず、その場にそのまま廃棄されたような状況での出土である。土器は15世紀後半から16世紀前半のもので、概ね一括資料として理解される。S X 6802はほぼ南北方向に並ぶ石列である。石の面は東側を意識して揃えている。建物の地覆石であろうか。時期の特定は難しい。S K 6803は東西にやや細長い土壙である。無遺物である。その他礎石とも考えられる石が3個検出された。

それぞれ断割を行い下層を確認したところ、6-8トレンチは地山面が遺構面で、6-7トレンチは0.5m以上の厚さの盛土造成によって整地された状況が理解された。

小結 平成10年度の発掘調査の主要成果は、寺院にとり重要な閼伽井の実像にせまれたこと、そして参道南の棚田上にも平安期の建物の存在が明らかになったことである。後者は平安期白川金色院のイメージを大

きく変更させられる内容であった。寺域の南限はさらに南へ調査が必要であり、次年度調査に引き継がれることとなった。前者の閼伽井跡の築造時期は今のところ不明である。発掘調査での状況は廃絶直前のそれを示したにすぎない。13世紀代の土器が少量出土しており、古く溯る可能性もある。またこのような井に池が付随する構造は決して特異ではない。天平勝宝8年(756)の『東大寺山堺四至図』にみえる現若狭井(閼伽井)は全く同じ構造をとり、大知波峠廃寺(愛知県湖西市)も同様である。前者は奈良時代、後者は平安時代である。こうした構造の閼伽井の現存例は知らないが、閼伽井すなわち聖水をくむ場は、こうした構造こそが本来的な形態ではないかと考えている。今後とも注視していきたい。

G. 平成11年度（第7次調査）

平成11年度の発掘調査目的は、寺域の南限を確定することである。調査区は計5カ所を設定した。

a. H11-1 調査区 7-1～3 トレンチ（図版17・28、写真図版38）

調査区は調査で最も南に位置し、東側丘陵からのびる小さな谷状地形にあたる。この谷状地形から南側には、坊院跡などを予測させる明確な造成地形が観察されないため、寺城南限の確認作業として7-1～3 トレンチを設定した。

7-1 トレンチは谷中央に細長く設定したもので、特に遺構は検出されず、遺物も出土していない。土層は耕作土下に耕作面造成の盛土層があり、現地表面下約0.7mのところには拳大の小石を含む自然堆積層が認められた。湧水が著しい。

7-2・3 トレンチはその南側と西側でグリッド状に設定した。無遺構・無遺物であった。

この両トレンチの層序は基本的に類似しており、耕作土下に耕作面造成の盛土層があり現地表面下1.5m辺りで炭層を確認した。ただしこの炭層は現代のものであり、現耕作面造成以前の地表面であると考えられる。下層は暗灰色粘質土や砂質土の地山層である。湧水が著しい。

b. H11-2 調査区 7-4～6・16～18 トレンチ（図版17・27、写真図版38・39）

調査区は白山神社の南にある独立した丘陵であり「べさん（別山）」と呼ばれているところと、別山東側の寺川を挟んだ丘陵部である。後者には『白山宮之図』に「夫婦岩」と標記される巨大な岩がある。別山は白川地区の自然景観の中で最も存在感が強い。頂部は比較的広い平坦地である。トレンチはこの丘陵頂部と裾部に7-4～6・16～18 トレンチを設定し遺構の有無確認を行った。

7-4・16・17・18 トレンチは丘陵頂部を中心に設定した。いずれも薄い表土を除去すると直ちに岩石質の地山が表われた。無遺構・無遺物であった。

7-5 トレンチは丘陵西斜面南裾に設定した。この部分には東西約5m、南北約10mのテラス面が認められ、その性格確認が目的である。このテラスの前の水田は「ジゾウドウ」と呼ばれている。表土を除去すると直ちに黄褐色の地山があらわれ、地山上に礎石を思わせる約20cmの平たい石が1個確認できた。無遺構・無遺物であった。

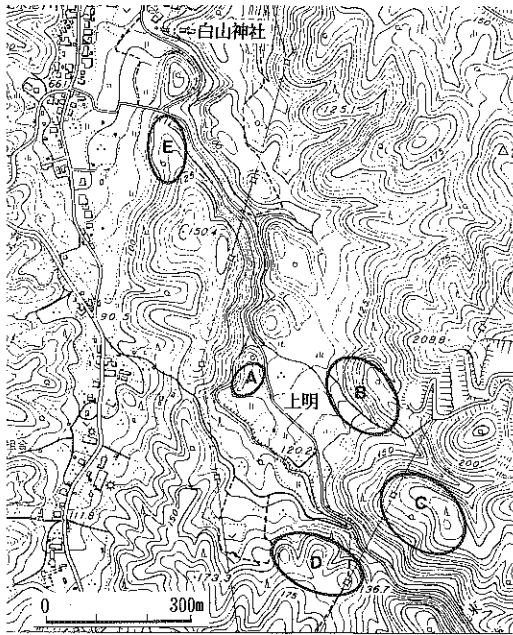
7-6 トレンチは丘陵東斜面南裾に存在する炭焼き窯に設定した。近代以降のものと思われ、清掃調査を行った。

巨大な岩は本来1個であったが割れて2個となっている。夫婦岩と呼称される所以であろう。白川にはこのような巨石は見ることができず、磐座状のものを想定し周囲の精査を行った。急斜面にあり、安全上十分な調査が行えなかった。無遺構・無遺物であった。

c. H11-3 調査区 7-7・8 トレンチ（図版17・28、写真図版38）

調査区はH11-1 調査区の谷状地形の北側で、坊院跡等を予測させる平坦地が認められる最も南部分となる。面積の大きい平坦地は茶畑であるため、その上の水田に7-7・8 トレンチを設定した。

7-7 トレンチは、耕作土と床土を除去すると黄褐色粘質土を基盤とした遺構面が確認され、トレンチのほぼ中央で素掘りの南北に走る溝1条が認められた。ただし削平を受けているようで、



第39図 上明地区の伝承地

採取し得た伝承地を第39図に示した。まずA地点は、土器あるいは兜・鎧が出土したと伝承される場所である。土器（茶碗）出土は電柱設置の時という。兜の出土は戦前のことであり、鎧は栗の木近くの近くを掘った時に見つかったが、その後埋め戻したという。B地点の平坦地の水田に「ハッコウデン」、山際の斜面に「ドウノモト」の地名が伝えられている。C地点の丘陵頂部は「テンノガラン」と呼ばれている。C地点は標高200mを越える高所であり、白川盆地を越えて西方に広がる平野部一帯を見渡せる。現地は樹木の繁茂が著しく詳細は確認できない。なお白川盆地はみえない。D地点の丘陵上の3つの平坦地は「カヤオウ」という名の僧侶が住んだ場所とされ、瓦がかつて散っていたといわれており、またそこへ続く道も現在残っているという。ちなみにE地点は白川地区別山の南丘陵にあたるが、この場所は「シンシヤマ」と言い、現在九重石塔の周囲に配された五輪塔群の一部は、当地にあったものを運んだものであるという。これらの伝承の実像については、今後、考古学的手続きを踏みつつ順次解明してゆく必要がある。トレンチはこの伝承地の中のA地点南側の水田に設定した。7-9トレンチと7-10トレンチである。周囲の茶畑を踏査すると中世期の土器片らしきものが採集された。

7-9トレンチは、耕作土を除去すると直ちに地山が検出された。無遺構・無遺物である。

7-10トレンチは、耕作土を除去するとその下層に耕作地盤造成の黄色粘土層があり、それを断ち割るとトレンチ中央で急激に落ちる地形が確認された。その埋土は下層が基本的に砂質層で、底部には拳大程の大きさの礫と小枝などの有機質が堆積していた。おそらく旧河川が耕地拡大によって埋め立てられたものと思われる。黄色粘土層からは、奈良時代の土師器片や須恵器片、あるいは平安初期の須恵器水滴などが出土した。この遺物を含む客土はおそらく近世ないし近代におけるものであり、状況的には付近から採掘されたものと推測できる。

伝承地のA地点の丘陵斜面には、数カ所のテストピットを設定した。この斜面は以前は耕作地だったようで、地山上に約0.7mの厚さの耕作土が認められた。

溝は極めて浅い。中世土器が出土した。7-8トレンチも7-7トレンチと同様で、南北溝とピットが約2個認められた。中世土器が出土した。

d. H11-4 調査区7-9・10トレンチ(図版17・写真図版39)

調査区は、白川谷から丘陵を南に越えた上明地区に設定した。上明地区は、白山神社前を流れ宇治川へと注ぐ寺川の上流にあたり、山間に南北約400m、東西約300m規模の小空間が開け茶畑・水田が展開する。現在は林道がその東縁を通っているが、少し前までは寺川を溯る小道しかない閉鎖的空間であった。

この全くの山間の小盆地にも、白川金色院に関係すると思われる伝承が伝えられている。今までに採

e. H11-5 調査区 7-11~15トレンチ (図版17・23~26 写真図版36・37)

調査区は寺の想定中心域の一角で参道の南に展開する棚田部に7-11~15トレンチを設定した。

7-11トレンチは、園池跡の窪地へと急激に地形が下降する部分の棚田である。耕作土・床土を除去すると礎石建物S B7111が検出された。建物南西部のみの検出で詳細は不明だが、現地地形から判断すれば小規模な建物が想定される。礎石周囲には拳大程の礫が集積する。またトレンチ中央を蛇行する溝状の土色変化が確認できた。この溝状の土色変化は、北へ傾斜する旧地形を埋め立てて平坦地化した造成土の下層の始まりが表われたもので、溝状の土色変化は北側肩を構成する地山類似層の造成土上層であると理解された。造成土下層は暗褐色土を基調とし、炭・焼土と共に礫・土器・瓦が包含されていた。土器は概ね15世紀後半~16世紀初頭のものである。瓦は平安後期河内向山系を含む。二次焼成を受けた瓦が散見され、土器にも一部同様のものがある。礎石建物S B7111は16世紀以降と考えられる。

7-12トレンチは、7-11トレンチと基本的に同一平坦地に設定したもので、耕作土・床土を除去すると柱穴や土壙が複数確認できた。掘立柱建物S B7121・S B7122の2棟の建物が想定される。礫集積も3カ所あり礎石根石の可能性が考えられる。出土した瀬戸焼は概ね15世紀代のものである。トレンチ南半分は淡黄色粘土の地山であるが、北半分は7-11トレンチと同様な整地層である。ただし複数回にわたり盛土整地されていることは7-11トレンチの状況と異なる。

7-13トレンチは、伝辻之坊跡の南側にあたる。このトレンチでも耕作土・床土を除去すると柱穴や土壙が複数確認できた。S B7131の1棟が想定される。前述トレンチ同様礫集積部があり、礎石根石の可能性が考えられる。整地層が広がり遺構はこの整地層上にある。断割では、下層に顕著な遺構は確認していない。床土中や遺構から中近世の土器類や平安後期の河内向山系瓦等が出土した。瓦は二次焼成を受けている。

7-14・15トレンチは、7-12トレンチの一段上の棚田である。7-14トレンチは耕作土・床土を除去すると直ちに淡黄色粘質土の地山が表われ、遺構は確認できなかった。7-15トレンチは、耕作土・床土を除去すると、重複する東西方向に延びる幅約1mの素掘り溝SD7151が検出された。検出面は整地層である。溝内からは中世期の瓦や土器類・焼土・炭が出土した。SD7151の後に掘られた溝SD7152では焼土・炭が充填されたような状況で認められた。礎石らしき石や前述同様礫集積が認められ、礎石根石の可能性が考えられる。

小結 平成11年度の調査目的である寺域の南限についてであるが、H11-1調査区の調査成果から白川盆地の南端部にまで概ね広がっていくことが明らかとなった。詳細については情報量不足であり、平成12年度調査でさらに整理していくこととした。白川盆地以外についても関係遺跡の存在が、地元の聞き取り調査から確認され将来の課題として考えられた。そしてH11-5調査区での炭・灰・瓦と15世紀後半の土器類を含む整地層下層の検出である。出土した瓦が二次焼成を受けており、以上のことから創建期建物が15世紀後半に焼失し、その後直ちに大規模に整地を行い再興する状況が理解できた。このことは『勸進状』に記された再興経過とほぼ一致し、これまでの調査以上にその具体的状況が明らかとなった。

H. 平成12年度（第8次調査）

平成12年度の発掘調査目的は、寺域の北限・南限を確定することである。計4カ所調査区を設定した。

a. H12-1 調査区 8-1～3 トレンチ（図版17・29、写真図版40）

トレンチは計3カ所設定した。調査前は休耕地であったが、最近まで水田として利用していた。いずれのトレンチも基本的に床土層は薄く、その直下で地山層が確認された。

8-2 トレンチでは東西に並ぶ木杭列が確認された。8-3 トレンチでは床土直下で寛永通寶が2枚出土した。また礎石と思わせる上面の平坦な自然石が1個確認された。その石を中心に調査範囲を広げたが、その後は無遺構・無遺物であった。調査状況からこの調査区は江戸時代に耕作地として開墾されたものと理解した。

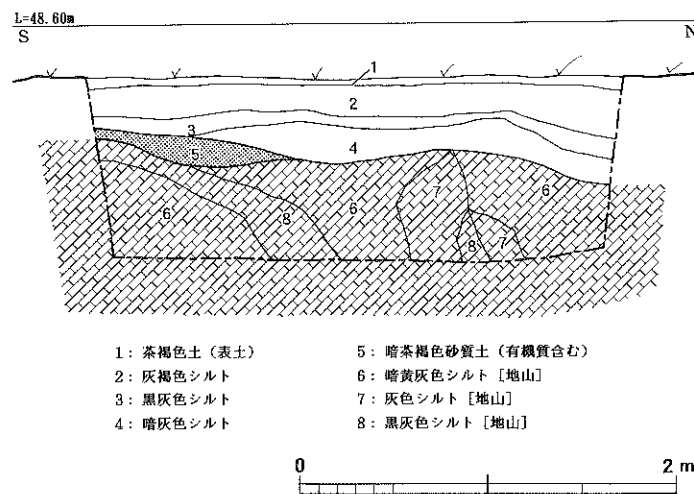
b. H12-2 調査区 8-4・5 トレンチ（図版17・29、写真図版40・41）

トレンチは計2カ所設定した。現地表面から8-4 トレンチでは約0.5m、8-5 トレンチでは0.8～1mで地山層が確認された。その上層は近世遺物を包含する層である。

8-5 トレンチでは現地形とは逆方向の南側へ向かって地山が低くなっていく状況がうかがえた。出土遺物から現在のように調査区が広い平坦地として造成されたのは江戸時代以降と理解された。そして造成以前は南北に細長い小さな谷地形であったと理解された。なお、江戸時代以降の造成土から河内向山系軒丸瓦が出土した。磨滅度が低いことから付近からの流入品と考えられ、調査区の北側上方に広がる茶畑からの混入品が想定された。

c. H12-3 調査区 8-6 トレンチ（図版17・29、写真図版40）

トレンチは調査区東端部に1カ所設定した。調査区は畑地で、耕作時にかつて瓦が出土したとされる場所である。その畑地の空閑地を調査した。現地表面下約1mで黒灰色土層が表われ、その上層の堆積状況から、かつては湿地状であったことが理解できた。上層では中世期の遺物が包含されていた。調査区付近では中世遺物が全くみられないことから、これらはこの調査区の実態を示しており、中世期にすでに何らかの土地利用がなされていたと判断した。地形的にみて中



第40図 8-4 トレンチ西壁土層断面図

世の坊院が存在していた可能性が考えられる。そうすると前述の黒灰色土層は園池の堆積層であろうか。

d. H12-4 調査区 8-7～18 トレンチ（図版17・30、写真図版41・42）

トレンチは計12カ所設定した。地元では「シンシヤマ」と呼んでいる。丘陵頂部の平坦面をなすところが2カ所あり、調査の結果無遺構・無遺物であったが、前述の呼称から社が存在していた可能性も考慮される。